

主語は敘述語に對して主語であり、敘述語は主語に對して主語である。敘述語の無い主語といふものは無く、主語の無い敘述語と云ふものは無い。譬へば夫婦の様なものである。夫と妻とは互に一方に對して夫であり妻であるのである。夫の無い妻、妻の無い夫といふものは無い。

主體關係の連詞は一對の主語敘述語より成るものである。併し一對とは必ずしも主語一つ敘述語一つであるとは限らない。一對の主體關係でありながら主語敘述語の一方又は双方が二つ以上あることも有るべきである。何となれば主體が一つで作用の二つ以上あることもあり、主體が二つ以上で作用が一つのことも有るからである。併し二つ以上の主體を一括して一つの主語で表はし二つ以上の作用を一括して一つの敘述語で表はすことも出来るのであるから、この二様の表はし方は區別されなければならぬ。例へば日本語で

1 鳥が鳶が飛んでゐる。

2 鳥や鳶が飛んでゐる。

一 木々の梢に小鳥らが飛んでゐる、鳴いてゐる、歌つてゐる。

ニ 木々の梢に小鳥らが飛んだり鳴いたり歌つたりしてゐる。

(1)は主語が二つで敘述語が一つである。(2)は主體は二つでもまだ主語にならない中に一纏めにされ、一纏めにされた上で一つの主語になつてゐる。(3)は敘述語が三つ有る。(4)は作用は三つでも一纏めにされて一つの敘述語になつてゐる。

(1)の様なものは主語の數、敘述語の數は二つ以上であつても主語と敘述語の關係は一つである。譬へば夫婦が一夫一妻ばかりでなく、一夫數妻もあり數夫一妻もあり、場合に由れば多夫多妻もある様なもので、其の關係は一つである。

日本語は格が精緻であるから(1)と(2)と(3)の區別が明確であるが、漢文は格が粗であるから(4)の様な連詞は作り憎い。

秦王使者告趙王欲與王爲好會於西河外澠池趙王畏秦欲毋行廉頗藺相如

計曰王不行示趙弱且怯也趙王遂行。史記廉頗列傳

始皇東遊會稽並海走瑯琊小子胡亥李斯蒙毅趙高從道病使蒙毅禱山川未及

還上崩李斯趙高立胡亥殺扶蘇蒙恬蒙毅卒以亡秦。蘇東坡始皇論

の——は主體は二つ以上であるが、前の(2)の例に相當するものであつて二つ以上

ある主體を一まとめにしてから一つの主語にしたので主語が二つ以上有るものではない。即ち普通の日本語が正しい。之を主語が二つ以上あるものとして了解するには無理にそう考へなければならぬ。漢文には主格が無くて一般格があるだけであるから主體の語を二つ續ければ二つの主語とならずに一括されて一つの主語となるのが自然である。問へ「及や若」を入れた所で同様である。敘述語の方も略同様であるがこの方は「矣」などの助けに由つて

一 其善美至矣盡矣  
二 其善美至且盡矣

の(一)の様に(二)と區別され得る場合がある。

**主語敘述語の代表部** 主語や敘述語が連詞より成る時は其の主語敘述語は代表部が有る。例へば

天下之賢才皆已舉用。韓愈復上宰相書

動植之物風雨霜露之所沾被者皆已得宜。同

の——は主語であり——は敘述語であるがその内部に就いて言へば。は主

語の代表部で●は敘述語の代表部である。そうして——は主語の從屬部で——は敘述語の從屬部である。

世間普通の文法書は主語敘述語の代表部を主語敘述語と稱し從屬部をも含めて言ふ場合は主部敘述部といふ。私はそれを取らない。

主語、敘述語の内部に於ける代表部と從屬部との關係は連詞の成分の五種の統合關係の何れかである。

主語は從屬語で敘述語は統率語である。世には主語の方が重要な語である様に思ふ人が多いが其れは主といふ文字に惑はされた考へである。主語とは作用の主を表はすといふ意味で斷句の主といふ意味ではない。主體關係に於て重要な語は敘述語である。敘述語が主語を統率して全體を代表するので、敘述語は主體關係の代表部である。今「落花」と「花落」を比較して見ると「落花」は「落ちた花」であつて物である。動作ではない。「落ちた花」も開いた花も凋んだ花も枝上の花も皆花であつて物である。されば「落花」では「花」が代表部で「落」は從屬部である。之と反對に「花落」は「花落つて」であつて動作である。「花落」も「月落つ」も「人落つ」も「橋落つ」も皆「落つ」の

中である。「花落は「落つてあつて花ではない。動作であつて物ではない。そうすれば「花落」の代表部は「落つてあつて」花は唯落つる物を區別するために附加した從屬部であることが分る。主語を斷句の主要の語だと解して居ては文法は分らない。  
**准主語** 主語は主體の概念を表はすものであるが、主體の概念を表はすとしての形式に於て主體の概念を表はすのでなければ主語ではない。主體の概念を表はす語の中には實質的には主體の概念を表はしながら形式上他の役目を成すものとして用ゐられたものが有る。それは次の二つの場合である。

一 主體概念の連體化 主體概念が主體概念としての形式に在るには其の概念が直接に、その作用を敘述する語の敘述作用に關係する場合でなければならぬ。「風散花」の「風」は「散」といふ作用の主體の概念であつて、散へ關係してゐるが「散」といふ動作概念その物へ關係するのではなく、散の敘述作用へ關係してゐるのである。それだから眞の主語なのである。然るに「風が散」といふ動作概念その物體へ關係する場合には「風之散花」となる。この「風之」は主體概念が連體化したものであつて、形式上主語でなくて連體語である。主體概念が連體化された場合に

は形式連體詞の「之」の補助に由り、或は代副體詞「其」に由つて表はされる。

〔主體概念の連體化〕

〔主體概念そのまゝ〕

天地之生萬物也固有餘——天地生萬物固有餘  
其生萬物也固有餘

この「天地之其」は主體概念を材料にした連體語であつて主語ではない。併し實質に於て主體概念であるから之を假に主語の如く考へることも出来る。眞の主語と區別して准主語といふ。准主語は主語ではない。同時にその對手なる準敘述語は眞の敘述語ではない。(第百頁参考)

二 主體概念の提示(修用化) 主體概念は詞から言へば主格的運用である。日本の口語で言へば「風が」は主格名詞で主格といふ運用に在る概念である。併し「風が」の「が」の意味を入れて「風が」といふ一つの物と視て「風が」を一つの材料として修用語を作る場合がある。例へば

風は吹かない      風も吹かない

といふと「風は」は「風が」の意である。即ち

風がは其れが吹かない 風がも其れが吹かない  
の意である。「其れがは主語であり「風」と「其れ」とは同一物であるが「風がは」は主體を  
材料にした修用語であつて主語ではない。漢文で言へば

是鳥也海運則將徙於南冥。莊子逍遙遊一

是人也乃曰不如舜不如周公吾病也。韓愈爭臣論

其責人也詳其待人也廉。同

の——の類がそうだ。こういうのを准主語といふ。實は修用語である。

**主語と題目語** 主語と題目語とは西洋文典では混同して居る。主語(文法的主  
語は作用の主體を表はすもので題目語論理的な主語)は判断の對象を提示するもの  
である。「花開(花が開く)」「月出(月が出る)」「花月(花は唯開出の主體であつて判断の對  
象を表はすものではない。唯此れを材料にし提示して題目にし「花也開」「花則開」「花  
是開的」「花は開く)の如く云つた場合は題目語である。且つ題目語は必ずしも主體  
を材料とするものではない。客體を材料にすることもある。「酒我不飲」「聖人我不  
當」「酒聖人」は客體概念を材料にした題目語だ。西洋には此れが無いから西洋人

に主語と題目語との區別が分らなかつたのである。

### 主語の材料

連詞の中に在つて主語となり得べきものは二つ有る。一は表示態名詞の一般格  
二は補充性副詞の或るものである。此の二種には主格といふ格は無いが、唯、名詞  
には一般格が有り、副詞には連用格が有つて其れ等に主格的用法が有るのである。  
其の主格的用法であることは其の詞自己のみの力でなく敘述語たるべきものと  
の相互の關係の上に認められる。

一名詞の一般格が主語になる

所貴乎朝廷清明而天下治平者何乎。蘇東坡決壘蔽

近者不親無務來遠親戚不附無務外交。墨子修身

百姓曉然皆知其汙漫暴亂而將大危亡也。荀子富國

是以臣或弑其君下或殺其上。同

事成功立上下俱富百姓皆愛其上。人歸之如流水。同

般有仁人曰箕子實具茲道以立世故孔子述六經之旨尤殷勤。柳子厚箕子碑  
天下之人聞執事之於愈如此皆曰執事之用韓愈哀其窮收之而已耳。韓愈上張僕射書

右の——及び——は何れも名詞の一般格であつて下の——に對して主語になつてゐる。名詞といふ中には動詞性名詞も含まれるのであつて右の——はそうだ。名詞が主語になるのは表示態だけである。他の敘述態、指示態、喚呼態の三つは主語にならない。

名詞には外延性(意義の固形的支持力)が有る。名詞より成る主語を外延的主語といふ。

二 副詞が主語になる。

或曰以德報怨何如子曰何以報德以直報怨以德報德。論語憲問

副詞の中明白に主語となり得るものは或だけである。その外の補充性副詞の中にも疑問の意を以て作用の主體を表はすものがあるがその主語たる場合は殆ど

無い。何となれば副詞は動詞の上に用ゐられ、そうして疑問詞は動詞の上に在れば漢文の癖として意義が提示される。それ故大抵は主體を表はしても主語にならずに主體の提示語となる。今奚所望に就いて言ふと

奚所望、  
① 何が望だ。  
② 何かは望なる。何がさ、望みかい。

①の意ならば主語で②の意ならば提示語である。其れは作者の心理状態如何に由つて決せられる。吾々讀者はその適當な方を選ばなければならぬが、まづ百中九十九までは提示である。

敘述語の材料

連詞の中に用ゐられて敘述語となるものは二つある。一つは動詞、一つは敘述態名詞で、何れも分主態に在る場合である。

一 動詞

天道亂而日月星辰不得其行地道亂而草木山川不得其平。韓愈原人

右の例の——は動詞であつて上の——に對して敘述語になつてゐる。そうして連詞的動詞たるものには代表部が有る。太字で書いたのは代表部である。動詞が敘述語となる場合は必ず分主態に在る。合主態に在る場合は敘述語にならない。そこで分主態合主態の解釋が必要である。

## 二 敘述態の名詞

形於上日月星辰皆天也形於下草木山川皆地也命於其兩間夷狄禽獸皆人也

韓愈原人

寡人之囿方四十里民猶以爲大何也 孟子梁惠王下

取之而燕民悅則取之古之人有行之者武王是也 同

右の例の——は上の——に對する敘述語であつて名詞の敘述態から成つてゐる。そうして太字はその代表部である。名詞の表現の相には表示態敘述態指示態喚呼態の四態が有る(舊三頁)が、敘述語となるのは敘述態だけであつて他の三態は決して敘述語にはならない。然るに此の四態の區別は形式名詞の「之馬諸」の三つが

常に表示態であるのを除いては、名詞自己の力で區別されることはなく必ず他詞との相互の關係上に於て區別されるのである。例へば上に主語たるべきものがある場合とか、上に「某之其」が有るとか、下に「也矣」などが有るとか、而が有るとか、其の他敘述態として無ければ意義を成さないとかいふ様な他詞との關係上から敘述態であることが判る。

名詞は敘述態であると決つた場合は動詞と同様の效力を持つ。併し動詞の場合と同様、其の分主態である場合のみ敘述語となるので、合主態であれば主語を取らないから敘述語にはならない。

動詞と敘述態名詞とは共に敘述性が有るから之を敘述的詞といふ。今次へ敘述的詞の分主態と合主態とを論ずる。

## 敘述的詞の分主態

動詞に分主性動詞、合主性動詞(第三頁)と分合主性動詞(第五頁)の三種あることは前に説いた通りである。分主性とはその動詞の本來の性質として主體の概念を控

除した作用そのものだけの概念を表はすもの、合主性とは主體の概念をも含んだ作用概念を表はすもの、分合主性とはその本性として分主合主の定らないものである。そうして合主性には「雨<sub>ス</sub>電<sub>ス</sub>下雨<sub>ス</sub>而<sub>ス</sub>」などが有るばかり、分合主性には「然<sub>ハ</sub>否<sub>ハ</sub>」等が有るばかりで一般の動詞は皆分主性である。

名詞の敘述態は皆分主性である。

分主性動詞と敘述態名詞とは、其の本性のまゝに用ゐる用法を分主態といふ。その用法に於ては主體概念が缺けて居つて意味が具備しない。それを具備させるためには敘述語となつて主語を取らなければならぬ。前頁に擧げた敘述語は皆それだ。

分合主性動詞の「然<sub>ハ</sub>否<sub>ハ</sub>」等は、其の本性としては分主合主が定らないものであるが、其の運用から言へば分主態か合主態かの一方に決るのである。然らばどういふ場合に合主態になり、どういふ場合に分主態になるかと云へば其れはこうである。此の二詞は代動詞であるから或る事柄を指示するのである。その指示に當つて主體をも含めて指す場合は合主態であるが、主體を事柄の中へ含めずに指示した場

合には分主態である。そうして分主態である場合は敘述語となつて主語を取る。

1 萬章曰、人有言、至於禹而德衰、不傳於賢、而傳於子、有諸<sub>ヤ</sub>。孟子曰、否、不然也。孟子萬

章上

2 子豈若是小大夫然哉。孟子公孫丑下

の(1)の——は合主態である。他人の問の語を受けていふ答であつて主體の概念が含まれてゐる。(2)の——は分主態で主體の概念が含まれて居ないから上に主語「予」が有る。

合主性動詞は本動詞の「雨<sub>ス</sub>電<sub>ス</sub>下雨<sub>ス</sub>」の類、形式動詞の「而<sub>ス</sub>」である。その本性のまゝに使へば合主態であつてその詞の中に主體と作用とが合體してゐる。「是日下雨<sub>ス</sub>」昨夜電<sub>ス</sub>」の「下雨<sub>ス</sub>」は主體をも兼ね表はすもので合主態である。併し特別に其の動作の主體概念を分化させれば、主體を含まないことになる。之を合主性動詞の分主態或は分主化といふ。その場合は主體概念を内に持たずに外へ求めるから主語を取つて敘述語になる。

天油然作雲沛然下雨<sub>ス</sub>則苗浥然興之矣。孟子梁惠王上

の——は敘述語で上の「天」はその主語である。

「而」は主語の有る前言又は分主化した前言へ寄生するものであつて常に合主態である。分主態にはならない。

**大小の主語** こゝに一種の合主性動詞が有る。其れは主語と敘述語とより成る連詞である。例へば「月出」「花開」の類だ。「出開」は分主性分主態で「月花」といふ主語を取つてゐるが既に主語と連結して出来た「月出」なり「花開」なりは自己の内部に「月花」といふ主體を持つてゐる。これは連詞なる合主性動詞である。そうして其の本性のまゝに用ゐれば合主態であつて別に主語を要求しない。

然るに其の主體に所有者が有る場合が有る。例へば「鶴頸長」「鶴之頸長」「鴨脚短」「鴨之脚短」「虎豹性甚猛」「虎豹之性甚猛」に於て「鶴」「鴨」「虎豹」は「頸」「脚」「性」の所有者である。此の所有者を所有者と見ずに「頸長」「脚短」「性甚猛」なる連詞的動詞の表はす作用の主體と見る時は

鶴頸長

鶴頸長し

鴨脚短

鴨脚短し

虎豹性猛

虎豹性猛なり

といふことが出来る。「——」なる合主性動詞はこの場合は分主化されてゐる。分主化させて考へるから別に「——」なる主語を取るのである。主語が二つ續いてゐる様であるが、「——」は「——」を敘述語とし、「——」に對して主語を成すので之を小主語と云ふ。「——」は「——」なる連詞を敘述語とし、「——」に對して主語を成すのであつて之を大主語といふ。

此の大小の主語には注意すべきことが澤山有る。

一、漢文には主格がなく一般格を主格的に或は連體格に用ゐるのであるから、大主語か連體語か分り難い場合がある。右の例の「——」は大主語として擧げたので下へ讀點を打つたが不注意に讀めば連體語とも考へられる。

鶴頸長  
鶴頸長し……………鶴が頸が長い  
鶴の頸長し……………鶴の頸が長い

文を作る人の考讀む人の心持で何方にもなる。併し前後の關係で大抵は一方に定まるのである。漢文を讀む時には前後の關係を見て適當に讀む必要が有る。



又他の詞の補助に由つて區別されることもある。

鶴者頸長脚長

鶴之頸甚長

などは明瞭に分る。

二、大主體は提示されて題目語になることが多い。題目語になれば日本語では多くは「も」を附けるが漢文では何も附けない場合が多い。

夫鶴頸長脚長

鶴則頸長

鶴亦頸長

鶴其頸長

の△などは題目語であることが明瞭だが

鶴頸長し

鶴の頸長し

鶴は頸長し

一 鶴の頸は長し

などはどうにでも讀める。題目語になれば眞の主語ではない。

三 大小の主體と云ふと主體が二つの場合には適當だが三つ以上有る場合もあるべきであるから上から數へて第一第二と數へる方が善い。

我聞 貴國 其君 仁義志 最深

又二個以上の主體有る場合には多くはその中の一又は二以上が提示されるから嚴密に言ふと大小主語と言へない場合がある。唯大小主體と云ふ方が善い。

今次へ大小の主體有る例を擧げる。――は大主體――は小主體――は小主體の作用……は主體の作用である。太字を用ゐたものは提示されて准主語となつたものである。

鄭子將行罷使臣囊無一物獻尊親江山路遠驛離日裘鳥誰爲感激人唐詩選七杜市

其後閣下位益尊伺候於門牆者日益進韓愈與陳給事書

智伯身死軍破國分爲三爲天下笑韓非子十過食復

閣下抱不世出之才特立而獨行道方而事實卷舒不隨乎時文武唯其所用韓愈

漢高祖挾數用術以制一時之利害不如陳平揣摩天下之勢舉指搖目以劫制項羽不如張良。蘇老泉高祖論

夫老人者以爲子房才有餘而憂其度量之不足。蘇東坡留侯論

栖筠之子吉甫其孫德裕功名富貴略與王氏等。同三槐堂銘

### 敘述的詞の合主態

合主性動詞「雨電」等が分主化する場合が有るとしても、その常態としては合主態であつて主語を要しないことは勿論である。又分合主性動詞「然」が主體と作用とを合せ指す場合には合主態であつて主語を要しないことも前述の通りである。分主性動詞は其の本來の性質上自己に主體概念を缺いて居るから本性のまゝに分主態として用ゐれば主語が要るのであるが、此れも合主化する場合がある。さうして合主化に一般性合主化と特殊性合主化との二種が有る。

### 特殊性の合主化

特殊性の合主化とは連詞中に於ける或る立場に於てのみ行はるゝ合主化をいふ（合主化とは主語が要らなくなることである）。これに種々ある。

一分主性動詞及び敘述態名詞は連體語となつて自己の主體を修飾する場合には合主化する。

〔分主態〕

一 鳥飛

人行

水流

花落

二 山高

國遠

佳人窈窕

〔合主化〕

飛鳥

行人

流水

落花

高山

遠國

窈窕佳人

嶮山峨々

峨々嶮山

≡ 老翁白頭

白頭老翁

美少年紅顔

紅顔美少年

右の例の上段に於て主語たる語は下段では被修用語になつてゐる。下段の被修用語は——の事柄の主體を表はしつゝ——に修飾され——を統率して其の連語の代表部を成してゐる。主語ではないが主體を表はしてゐる。下段の——は上段の——の様に主體との統合作用を表はすものではなく、既に主體と統合された結果たる作用概念を表はすものであるから被修用語が自己の主體を表はす以上別に主語を求める必要がないのである。

右の例の(一)は動作動詞(二)は形容動詞(三)は敘述態名詞である。「老翁白頭」は「老翁白頭なり」の意であるから「白頭」は表示態ではなくて敘述態である。敘述態に在れば動詞と効果を等しうする。

右の例の(一)の様なのを西洋文典では動詞の分詞法(Participle)といふ。(二)の様なのを性質形容詞(Qualifying adjective)といふ。そうして分詞法と形容詞とは主語を取らないから動詞では

ないといふ。併し主語を取らないのは合主化するからである。主語を取らなくても敘述性のある内包詞は動詞でなければならぬ。

二 形式名詞「者」をして自己の主體を表はさしめ之に對して實質語となつた場合

〔分主態〕

〔合主化〕

鳥飛

飛者

人行

行者

山高

高者

佳人窈窕

窈窕者

老翁白頭

白頭者

右の例の下段の——は主語を取らぬ。

「鳥飛」の「鳥」は主體で「飛」は作用である。「飛者」の「飛」は作用で「者」は主體である。併し「鳥飛」と「飛者」とは非常に違ふ。「鳥飛」は主體概念(鳥)が作用概念(飛)に從屬し作用概念(飛)はその連詞の代表部であるから、その連詞(鳥飛)は作用を表はすが、「飛者」は作用概念(飛)が主體概念(者)に從屬して主體概念(者)がその連詞を代表してゐるから、その連詞(飛

者は物を表はす。

「飛者」と「飛鳥」とも文法上大變に違ふ。「飛鳥」の「飛」は連體語として「鳥」を修飾するから丁度日本語の「飛ぶ鳥」に當る。然るに「飛者」の「飛」は連體語ではなく連體的用法ではない。「飛」は實質語であつて單に「者」といふ形式語に實質的意義を補給するのである。「飛者」は日本語では直譯が出来ない。「飛ぶ者」といふと「飛ぶ」が第四活段連體格であるから違ふ。「飛者」の「飛」は第一、二、三、四、五、活段にない「飛」である。

「白頭者」も「白頭なる者」と云つては直譯にならない。「白頭なる」といふと第四活段で連體語になつて仕舞ふ。第何活段でもない所の「白頭なる」でなければならぬ。「白頭なり者」「白頭ならず者」「白頭者」位に考へなければならぬ。

三 形式副體詞の「之」の上に在つて「之」と共に自己の主體を修飾する場合

〔分主態〕

鳥飛

鳥高飛于天

山高

〔合主化〕

飛之鳥

高飛于天之鳥

高之山

嵩山高於泰山

老翁白頭

高於泰山之嵩山

白頭之翁

右の例の下段の——には主語は無い。

「高飛于天之鳥」の「高飛于天」は連體語ではない。唯さういふ作用の實質を表はすのである。さうして「之」の形式的意義に對して實質的意義を補給するだけである。さういふのを實質語といふ。「之」はそれに對する形式語である。これは「高く天に飛ぶの鳥」と云へば略直譯に近い。たゞ「之」が形式副體詞であるのに「之」が助辭であるだけである。

四 連用的用法に在る場合はその下の語と主體を同じうする時には合主化する。

〔分主態〕

漢用陳平計

項羽疑范增與漢有私

增與羽比肩

崑錯盡忠

〔合主化〕

漢用陳平計間疎楚君臣

項羽疑范增與漢有私稍奪其權

增與羽比肩而事義帝

崑錯盡忠爲漢諫弱山東之諸侯

右の上段の——は分主態であるから主語。が有る。下段の——は合主態であるから主語が要らない。下段では。は——の主語ではなくて——の主語である。——は——と主語を同じうして——へ従属するから主語が要らない。

五 状態的用法に在る場合

〔分主態〕

鳥飛高

我不見君久

人去速

其遊遠

〔合主化〕

鳥高飛

我久不見君

汝速去

父母在不遠遊

の下段の——は状態的用法である。その主體は下の被修用語が表はすから主語が要らない。

六 單純形式動詞(來、盡、於、以、自)の類の上に在つて之に對して實質語を成す場合

天子呼來不上船、自稱臣是酒中仙。唐詩選二杜市飲中八仙歌

楊花落盡子規啼、聞說龍標過五溪、我寄愁心與明月、隨風直到夜郎西。唐詩選七李

白 況陽春、召我以煙景、大塊假我以文章。李白宴桃李園序

葉公問孔子於子路、不路不對。論語述而

公及戎盟于唐、冬公至自唐。左傳桓二

實質語——は形式語——に従属するから實質語の方には主語が無い。主語。は——の全體に對して主語である。單純形式動詞は第六一—九頁に説いてある。

七 歸著形式動詞の下に在つて之に對して客語を成す場合

吾力足以舉百鈞、而不足以舉一羽。孟子梁惠王

五畝之宅、樹之以桑、五十者可以衣帛矣、雞豚狗彘之畜、無失其時、七十者可以食

肉矣。同

於諸侯之約、大王當王關中。史記淮陰侯列傳

由屐經過滿徑、蹤隔溪遙、見夕陽春、當時諸葛成何事、只合終身作臥龍。三體詩一薛能

今雖不能如周公之吐哺、握髮亦宜、引而進之、察其所以而進退之、不宜默々而已

也。韓愈復上宰相書

平沙列萬幕，部伍各見招。唐詩選一杜市後出塞

道既通遊事，齊宣王宣王不能用。史記孟軻列傳

舜之不臣堯，則吾既得聞。孟子萬章上

詩云：普天之下，莫非王土；率土之濱，莫非王臣。同

誠令成安君聽足下計，若信者亦已爲禽矣。史記淮陰侯列傳

右の——は動詞又は敘述態名詞で上の歸著形式動詞——に對して客語(無形の)を成してゐるから自己に主語が要らない。動詞又は敘述態名詞を客語とする歸著形式動詞は「可足當應合宜暇逸庶庶幾見遇遭須能得被莫無勿毋罔爲」等其の例は第三六一—三六頁に出してある。

七 動詞性名詞となつて、自己の作用と主體を同じうする作用を表はす他の動詞に對して客語又は主語となる時は自己に主語が要らなう。

今夫天下之人，牧未有不嗜殺<sup>ヲシテ</sup>人者也。孟子梁惠王

若<sup>オシテ</sup>雖長<sup>ヲシテ</sup>大<sup>ヲシテ</sup>好<sup>ヲシテ</sup>帶劍<sup>ヲシテ</sup>，中情怯耳。史記淮陰侯列傳

古之欲明明德於天下者，先治其國。大學

雖有智者，亦不知爲齊計矣。史記淮陰侯列傳

不知天下治歟，不治歟，億兆願戴己，歟，不願戴己，歟。十八史略帝堯

の——は動詞が動詞性名詞となつたものであるが、その作用の主體は上の——なる動詞と同じであるから自己には主語が要らない。

以上七つの場合は皆その詞が連體的用法或は實質的用法、或は連用的用法に在る場合にのみ合主化するのである。若しその用法が變つて連詞又は斷句中に於けるその詞の立場が變れば、その合主化作用は忽ち消滅するものである。例へば「飛鳥」の「飛」に就いて言へば、「飛」は連體格であつて自己の主體たる「鳥」を修飾する立場に在るから合主化して主語を要しないが、「鳥飛於天」といふ時は、さういふ立場には居らないから本性たる分主性に復して主語(鳥)を要することになる。

### 一般性の合主化

一般性の合主化とは其の詞の連詞中に於ける立場に關係の無い合主化である。

その用法が連體的であるとか連用的であるとか終止的であるとかいふことに關係の無い合主化である。これに次の數種がある。

一 その詞の意義上主體が一定してゐる事件を表はすものは合主化する。

イ 其所求進見之士雖不足以希望盛德至比於百執事豈盡出其下哉。 韓愈復上宰相書

ロ 不至十日而兩將之頭可致於戲下。 史記淮陰侯列傳

ハ 當此之時子房之不死者其間不能容髮。 蘇東坡留侯論

ニ 中天懸明月令嚴夜寂寥。 唐詩選二杜市後出塞

ホ 入夜轉清迥蕭々北風寒。 同常建西山

ヘ 三徑就荒松菊猶存携幼入室有酒盈樽。 陶淵明歸去來辭

ト 唯見碧水流曾無黃石公。 唐詩選一李白懷張子房

右の例の『の動詞は其の作用の主が一定してゐる。』の『至は何が至るか』と云へば問題が至るのである。①の『至は日數が至るのである。』②は時が此の時に當るのである。③は時が夜に入るのである。④⑤は自然が明月を懸け自然が酒を有ち自然が黃石公を無いのであつて其の主は一定動かすべからざるものである。

それだから觀念のまゝで概念化しないから言語に表はされない。之を強ひて概念化して言語に表はせば徒に煩はしいだけである。

大小の主體の有る場合に小主體の一定してゐる場合がある

足下幾歲 我既白髮

彼豎子猶黃口 彼頗雄辯

の——は大主語で——なる敘述語に小主語がない。「幾歲」の小主體は必ず年齢で、「白髮」の小主體は必ず髮、「黃口」の小主體は必ず口、「雄辯」の小主體は必ず辯舌であつて一定動かすべからざるものである。それだから必ずしも足下年幾歲などと小主語を用ゐるには及ばないのである。

二 一般に關する作用であつて特定の主體の無い場合には合主化する場合が多い。

心不在焉視而不見聽而不聞食而不知其味。 大學

父母在不遠游游必有方。 論語里仁

質勝文則野文勝質則史文質彬彬然後君子也。 同雍也

不憤不啓不悱不發舉一隅不以三隅反則不復也。同述而

右の——は事一般に關するものである。誰でもそうである。縱令全體でないまでもそうあるべき人は誰でもそうあるのである。そういう場合には主體が概念化しない場合が多い。

三 思想者自己の動作状態は之を他と比較しない場合は主體を考へない場合が多い。

歸去來兮。田園將蕪。胡不歸。既自以心爲形役。奚惆悵而獨悲。悟已往之不諫。知來者之可追。實迷途其未遠。覺今是而昨非。舟搖搖以輕颺。風飄々而吹衣。問征夫以前路。恨晨光熹微。陶淵明歸去來辭

乃詔齊捕蒯通。蒯通至。……上怒曰烹之。通曰嗟乎冤哉烹也。史記淮陰侯列傳

四 説話の對者の動作を表はす場合に命令的用法に在る時にはその主體を考へない場合が多い。

衆辱之曰信能死刺我不能死出我袴下。史記淮陰侯列傳  
曾子有疾召門弟子曰啓予足啓予手。論語泰伯

五 前からの續きに由つて作用の主體が解つてゐる時はその主體は觀念のままに概念化されずに存するから主語を成さない場合が多い。

天地不仁以萬物爲芻狗。聖人不仁以百姓爲芻狗。天地之間其猶橐籥乎。虛而不屈動而愈出。老子上

尾生與女子期於梁下。女子不來。水至不去。抱梁柱而死。莊子盜跖

帝騎龍上天。羣臣後宮從者七十餘人。小臣不得上。悉持龍鬚。髻拔墮弓。抱其弓而號。十八史略黃帝

其仁如天其知如神。就之如日望之如雲。都平陽。同帝堯

六 作用の主體が主語に由つて表はされずに他の語に由つて表されてゐる場合  
1 主體が提示されてゐる場合

古之所謂豪傑之士必有過人之節。蘇東坡留侯論  
千金之子不死於盜賊。同

夫天下者祖宗之天下也。陛下所居之位祖宗之位也。胡澹菴上高宗封事

右の——は準主語(第貳頁)であつて主語ではない。——は主語を持たない。



2 主體が連體語の材料となつてゐる場合

楊侯之去、丞相有愛而惜之者。韓愈送楊少尹序

王之不王、不爲也、非不能也。孟子梁惠王

秦兵之攻楚也、危難在三月之內。史記張儀列傳

の——は連體語である。矢張準主語(第貳頁)であつて主語ではない。

3 主體が場所として表はされてゐる場合

宰我問、三年之喪期已久矣……子曰、食夫稻、衣夫錦、於女安乎。曰、安。曰、女安則爲之。夫君子之居喪、食旨不甘、聞樂不樂、居處不安、故不爲也。論語陽貨

の——は主體が場所として取扱はれてゐるから修用語であつて主語ではない。だから「安」は主語を持たない。

4 主體が説明されてゐる場合

人而無信、不知其可也。論語爲政

子曰、富而可求也、雖執鞭之士、吾亦爲之。同述而

子曰、夫召我者、而豈徒哉、如有用我者、吾其爲東周乎。同陽貨

「人而無信」はその主體が人であつて、そうして信を無いの意で主體たるべき「人」が敘述されてゐる。それ故「無信」は主語がない。

六 動詞が被動態又は使動態に在る時は其の原動の主體を表はす主語を用ゐることはない。

魏豹彭越……懷叛逆之意、及敗不死、而虜囚、身被刑戮。史記魏豹列傳

黥布……少年、有客相之曰、當刑、而王及壯、坐法、黥。同黥布列傳

楚王重地尊秦、秦女貴而夫人斥矣。同張儀列傳

平原君遂見新垣衍、曰、東國有魯仲連先生者、今其人在此、勝請爲紹介、交之於將軍。同魯仲連列傳

魏安釐王使將軍晉鄙救趙。同

の——は被動又は使動であるが其の原動に對する主語はない。例へば「虜囚」は「虜囚せられ」の意で魏豹彭越は「虜囚せられ」に含まれてゐる「られ」の主である。原動「虜囚せ」の主は高祖であるが主語に表はされてゐない。

被動使動の原動の主體を表はす必要の有る時は之を被動使動の原動の主體と見

ず被動使動の客體として表はす。例へば原動「賊殺人」を被動で「人被賊殺人見殺於賊」人殺於賊と云ひ原動「木匠建屋」を「主人使木匠建屋」主人使建屋於木匠といふ類だ。「賊木匠」は被動使動の客語となり間接に原動の主體を表はす。直接に被動使動の原動の主語となることはない。

但し使動に在つてはその原動に大小の主體が有る場合には小主體だけは原動の主語を以て之を表はす。例へば

使學生男子穿洋服女子着袴子

の類だ。大主體學生は使動の客語であるが小主體男子女子は原動の主語である。蓋し小主體は——と共に原動を成すのである。今之を古文に求めれば

季氏使其乘之人以其役邑入者無征不入者倍征。左傳襄十一年

などがそうだ。——は原動の大主體で「使」の客語、——は原動の小主體で原動の主語だ。併し古文の例には次の様なものが多い。

使<sup>○</sup>之去豎刁一豎刁又至<sup>○</sup>。韓非子難一管仲

國君進賢如不得已將使<sup>○</sup>之卑踰尊疏踰戚可不慎與。孟子梁惠王下

使<sup>○</sup>之負棟之柱多於南畝之農天架梁之椽多於機上之工女釘頭之磷々多於在庾之粟粒……杜牧阿房宮賦

これらには「使」に客語が無い。「之」は潜んでゐる客體觀念を假に概念化して私が補つて見たのである。——は——なる作用の小主體で——の主語となつてゐる。

——は——なる動作の大主體での例ならば「使」の客語であるが(四)では客語とならずに「使」の内部へ潜んでゐる。此等を読むのに「棟を負ふの柱をして」と云ふ様に讀むのは善くない。「棟を負ふ柱は」と讀むべきである。

被動に在つては小主體と雖も主語にならない。

被動態使動態に關しては第五四—五六頁及び被動使動の形式動詞「見遇遭」(第三一—三三頁)、「被」(第三三頁)、「爲」(第三三頁)の參照を煩はす。

七 被修飾形式動詞 「可」の小主體は常に修飾語に由つて表はされるから小主語は無さ。

求也爲季氏宰無能改於其德而賦粟倍他日。孔子曰求非我徒也。小子鳴鼓而攻

之可也。孟子離婁上

三〇

〇〇は大主體で主語、——は小主體だが主語でなくて修用語である。「可」に小主語が無い。「攻めて可なり」であるが裏面に「攻めるが善い」といふ意が含まれる。

## 第二節 客語と歸著語

### 客體關係の連詞

客體關係の連詞は客語と歸著語より成る。

客語は共に一連詞を構成する相對的二成分の一方であつて相手の一方の表はす作用(廣義)の客體(目的物)を表はして之に従屬するものである。例へば

吾聞之申包胥曰、人衆者勝天、天定亦能勝人、世之論天者皆不待其定而求之。故以天爲茫茫。蘇東坡三槐堂銘

窮居而野處、升高而望遠、坐茂樹以終日、灌清泉以自潔。韓愈送李愿序

亭以兩名志喜也、古者有喜則以名物示不忘也、周公得禾以名其書、漢武帝得鼎

以名其年、叔孫胸敵以名其子、其喜之大小不齊、其示不忘一也。蘇東坡喜雨亭記

右の例の——は客語であつて——の表はす作用の客體を表はす。

□歸著語は相與に一連詞を構成する二成分の一方であつて他の一方客語の表はす所のものに歸著する作用を表はし、之を統率して其の連詞を代表するものである。例へば前例の——は歸著語である。——に對して之に歸著する作用(廣義)を表はしてゐる。

歸著語と敘述語とは違ふ。連詞の成分は皆相對的である。主語に對して之に相對的なる成分が無くてはならない。其れは敘述語である。客語に對して之に相對的なる成分が無くてはならない。其れが歸著語である。

然るに從來の各國文典は歸著語といふ名稱がなくて敘述語と混同し、成分と成分とを相對的に考へずに漫然主語客語、敘述語などと云つて居る。例へば「人酒を飲む」を解剖して

主語 客語 敘述語  
人 酒を 飲む

主 敘 客  
人 飲 酒

などの「如くにする」。これでは成分の相對的關係が分らない。須らく



の如く解釋すべきである。此れならば相對的關係がよく分る。客語(酒を)は主語「人」に對しては何等直接の關係はないのである。唯歸著語「飲む」に對して相對的成份であつて之に従屬するのである。

從來の文典に歸著語といふ名稱が無かつたことは一大缺點である。例へば次の様なものは歸著語といふ名稱なしには解剖が出来ない。



右の例の「鹿を追ふ」は解剖が出来ない。「鹿を」が「追ふ」に對して客語であることは明白であつても「追ふ」は主語が無いから敘述語と云ふことが出来ない。歸著語と云

ふ名稱がない爲に「鹿を追ふ」の解剖が出来ない。唯「鹿を追ふ」の全體を修飾語と稱しこゝにいふものを小句と名づけて解剖外に置く。誠に氣のきかない話である。

客語と歸著語との一對から出來た連詞を客體關係の連詞といふ。一對の客語歸著語とは主體關係の處でも述べた様に、必ずしも客語歸著語が各一つづゝとは限らない。客語なり歸著語なりが二個以上有ることも有る譯である。日本語には

野に山に里に、花咲けり鳥鳴けり霞立ちたり。

といふ様なものもある。併し漢文には殆どさういふことが無い。大抵客語と歸著語とが一つづゝ相對する。それは名詞の格が粗であつて客語たることを示す力が弱いからである。

方唐貞觀開元之間公卿貴戚開館列第於東都者號千有餘邸。李文叔書洛陽名園記後の様な例はあるが、これとても「開館」と「列第」とは二つの歸著語として客語「東都」に對するのではなく「開館列第」として一括された者へ形式動詞の「於」が附いて、その上一つの歸著語になるのである。

大小の客語 主語に大小の主語が有ると同じ様に客語にも大小の客語が有る。

決大河而放之海。蘇東坡龍谿論

逢蒙學射於羿。孟子離婁

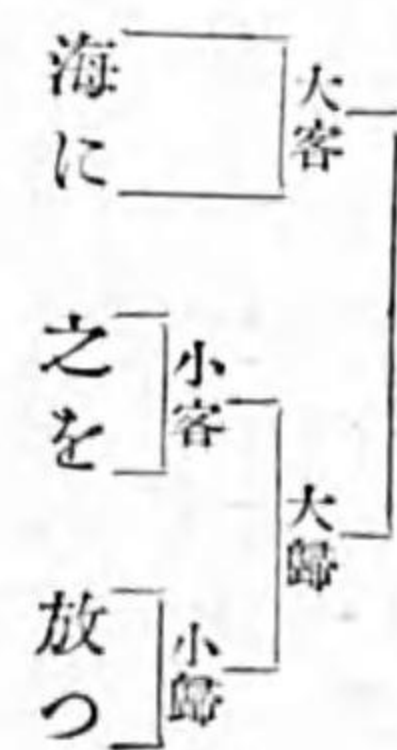
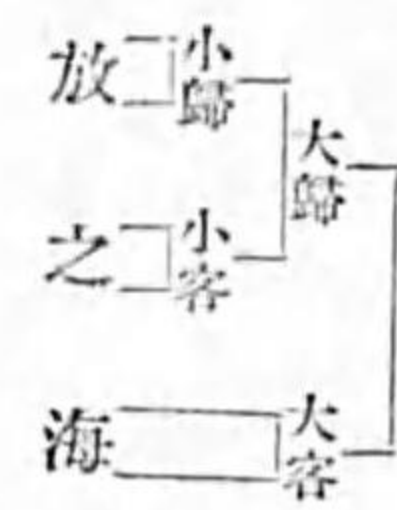
直蜀相攻擊各來告急於秦。史記張儀列傳

秦奚食夫孤國而與之商於之地六百里。同

使人隨張儀苟與吾地絕齊未晚也不與吾地陰合謀計也。同

是我出地於秦取償於齊也。同

の「」は大客語で「」は小客語である。之を解剖すれば



である。小客語と小歸著語とより成る連詞が大歸著語となつて大客語を取るの  
である。「於」は形式動詞であつて其の上の動詞(學射)を助けて依據性を表はし之と  
共に一連詞的動詞を成すもので「於」には「す」(於てす)の意義がある。

**准客語** 客語は客體を客體として表はすものである。客體を表はしても客體  
の意義が提示されると客體を客體として表はさず屬性として表はしたことにな  
る。例へば、

博愛之謂仁

誰與嬉遊

の「之」誰は「謂遊」の客體を表はすが客體の意義を提示してゐる。「之を誰」と平坦に  
云はずに「之をば之をぞ誰とか誰とし」など云つた様に所謂る Imphatic に意義が高  
く揚げられてゐるから實は修用語である。之を准客語といふ。(第百頁參考)

### 客語の材料

連詞の中に用ゐられて客語となるものは四種有る。一、表示態名詞、二、副詞、三、普通

の動詞、四、横型動詞、この四つである。

一 表示態名詞 名詞の相に表示態、敘述態、指示態、喚呼態の四つが有るが、其中で客語になるのは表示態だけである。勿論單に表示態名詞といふ以上、單詞でも善く連詞でも善い。正態名詞でも變態名詞でも善い。又複性詞の名詞部は名詞と同効である。

君子懷德、小人懷土、君子懷刑、小人懷惠。論語里仁

子曰、由也好勇、過我無所取材。同公治長

未有義帝亡而增獨能久存者也。蘇東坡范增論

陳平雖智、安能間無疑之主。同

の——は單詞的名詞で、——は連詞的名詞である。何れも——に對して客語である。そうして太字は連詞の代表部である。

盜起而不知禦、民困而不知救、吏姦而不知禁、法斁而不知理、糜廩粟而不知耻。

劉覆瀛寶柑者言

道……湛兮似或存、吾不知其誰之子、象帝之先。老子上

歸而謀諸婦。蘇東坡赤壁賦

の——は變態名詞で客語になつてゐる。•は複性詞であつてその名詞部に因つて客語を成す。

一般の名詞は唯一の格一般格の客格的用法を以て客語を成すのである。そうして一般格には他の用法も有る。唯形式名詞の「之」焉の二つは一般格が無くして客格が有るだけであるから、専ら客語(又は客體提示語)になる。他の用法は無い。複性詞の「諸」は「之於」又は「之乎」と同價値であるからその「之」の意義から觀た用法が「之」と同様客語になるのである。

二 副詞 補充性副詞の「自」は明確に客語になる場合が有る。

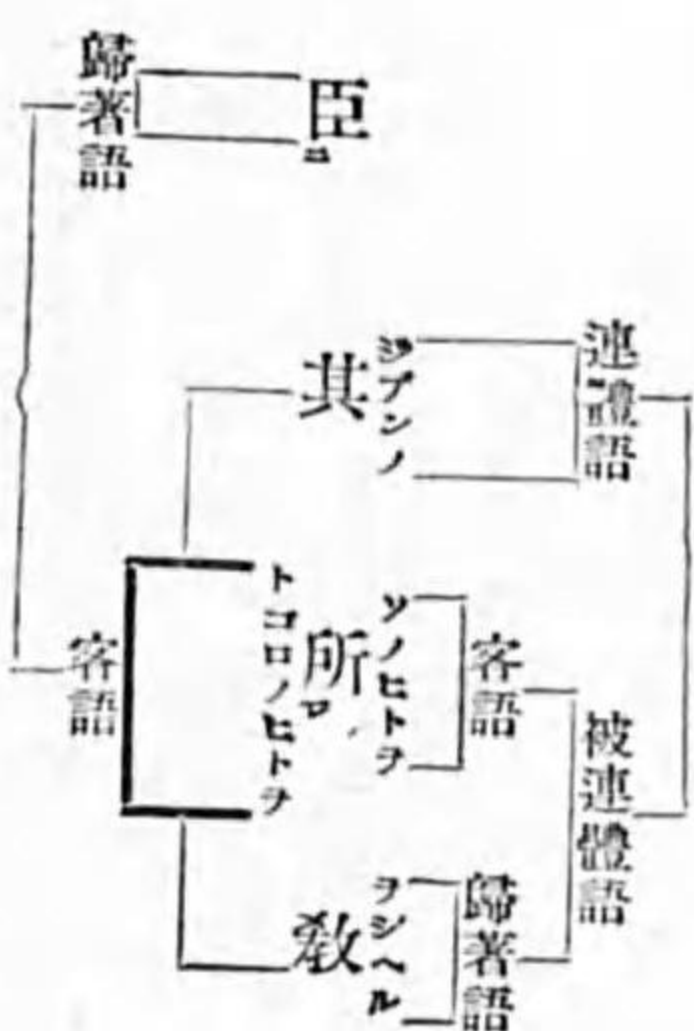
君子曰、志所謂多行無禮必自及也、其是之謂乎。左傳襄四

「自及」は「及於己」の意であるから「自」は客語である。併し「項羽弑義帝自立」などは「自立」の意であるから、さういふ場合の「自」は修用語である。

複性詞の「所」はその有する副詞的意義を以て客語になる。「所」は二重の運用を持つてゐる。

好<sub>レ</sub>臣<sub>ヲ</sub>其所<sub>ニ</sub>教<sub>ス</sub>而不好<sub>レ</sub>臣<sub>ヲ</sub>其所<sub>ニ</sub>受<sub>ル</sub>教<sub>ヲ</sub> 孟子公孫丑

の「所」は第一運用は副詞的運用で下の「教<sub>ス</sub>」に對して客語を成す。「所<sub>ニ</sub>を教<sub>ス</sub>へる」「所<sub>ニ</sub>に教<sub>ス</sub>を受ける」の意だ。又第二運用は下の「教<sub>ス</sub>」を統率して名詞的運用を成す。右の例では「臣<sub>ヲ</sub>」に對して客語になる。自分が教<sub>ス</sub>へる所<sub>ニ</sub>を臣<sub>ト</sub>する意自己が教<sub>ス</sub>を受ける所<sub>ニ</sub>を臣<sub>ト</sub>する意だ。



補充性副詞の中に多數の疑問不定副詞が有つて其の中には作用の客語を表はすものが有る。作用の客語を表はしても副詞の性質として動詞の下へ用ゐられず必ず上へ用ゐられる。疑問詞を動詞の上へ用ゐると漢文では意味が提示される癖が有る。其れ故疑問副詞は客語を表はしても客語とならずに提示語となる。

例へば「安在」は「何處」にか在るの意で「何處」の意義が提示されてゐる。「焉」適歸は「何處」にか適歸せむの意で「何處」の意が提示されてゐる。之を准客語といふ。客語の様であるが客語ではなくて提示的修用語である。

三 普通の動詞 普通の動詞は唯形式動詞に對してのみ客語となる。但し内包的客語である。

倫之議乃曰我一屈膝梓宮可還太后可復淵聖可歸中原可得 胡澹菴上高宗封事

其於人也曰彼人也能有是是足爲良人矣能善是是足爲藝人矣 韓愈原毀

屈原曰舉世混濁而我獨清衆人皆醉而我獨醒是以見放 史記屈列傳

知不可乎驟得託遺響於悲風 蘇東坡赤壁賦

右の例の「」の動詞は上の形式動詞——を歸著語とし之に對して客語を成す。客語はその名詞より成るものを外延性客語と云ひ、動詞、副詞より成るものを内包性客語といふ。外延性客語は作用の客語の概念を完全に表はし、内包性客語は客語の概念の内包的意義だけを表はす。

四 模型動詞 模型動詞は専ら生産性動詞に對して客語を成す。

宰我問曰仁者雖告之曰井有仁焉其從之也。論語雍也

人死則曰非我也歲也。是何異於刺人而殺之曰非我也兵也。孟子梁惠王

嗚呼仲以爲威公果不用三子矣乎。蘇老泉答仲論

人皆謂我毀明堂毀諸已乎。孟子梁惠王下

の——は上の生産性動詞——に對して客語を成してゐる。(「曰」爲は生産性の形式動詞である。)

模型動詞は聲音言語思想等を材料として實際の作用たる發音作用發言作用思惟作用などの模型を作り模型を以て實際の作用を代示するものである。意義は實際の作用の方に在るので模型の方には何等の意義はない。唯實際の作用の代りだといふ意味が有るだけであるから如何に長くても一續きならば一つの模型動詞である。又

文王以民力爲臺爲沼而民觀樂之謂其臺曰靈臺謂其沼曰靈沼。孟子梁惠王

子楚遂立姬爲夫人。史記呂不韋列傳

の——も模型動詞が上の——に對して客語となつたものである。勿論もと名詞

であるが上の——に對するとしては名詞としてではなく模型として「靈台」といふ言語を用ゐる作用(命名作用)夫人として取扱はれる作用を代示するに在るから嚴密に言へば模型動詞である。

生産性動詞の客語は之を生産の客語といふ。それは専ら模型動詞から成るのである。日本讀では生産の客語は「と」を添へて讀む。

模型動詞の解は第三頁に詳しい。再讀を煩はす。

### 歸著語の材料

連詞の中に用ゐられて歸著語となるものは二種ある。一は歸著態の本動詞、二は歸著態の形式動詞、三は前置詞、四は歸著性の名詞である。

一、本動詞 本動詞の歸著語となるものに次の三つがある。

1 他動性の動詞

中原還逐鹿投筆事戎軒縱橫計不就慷慨志猶存仗策謁天子驅馬出關門請纓

繫南粵憑軾下東藩。唐詩選一魏徵述懷



右の——は他動性動詞で、——を客語として之に歸著語を成す。他動性動詞の他動性に對する客語は「之」の二つだけは客語格で他の諸名詞は一般格で、副詞は連用格である。そうして其れらが他動性動詞の客語たる場合には之を他動性の客語といふ。

## 2 依據性動詞

月落烏啼霜滿天。江楓漁火對愁眠。姑蘇城外寒山寺，夜半鐘聲到客船。張繼楓橋夜泊

願君留意臣之計。否必爲二子所禽。史記淮陰侯列傳

趙王成安君陳餘聞漢且襲之也。聚兵井陘口。同

兵法不曰陷之死地而後生置之亡地而後存。同

——は依據性動詞で、客語——に對して歸著語を成す。

依據性動詞の依據性に對する客語は「之」の二つに在つては客語格、他の名詞に在つては一般格、副詞に在つては連用格であるが、其の運用は日本語の依據格「何々に」に等しいものである。之を依據の客語といふ。

動詞の依據性は不明確な場合がある。その依據性を明確にする爲には、其の動詞

を實質語にして其の下へ形式語として「乎於于」といふ形式動詞を附ける。例へば「歸故郷」の「歸」の依據性を明確にする爲に「歸於故郷」とする類だ。そこで「乎於于」の取捨の問題を生ずるが、そのことは實質關係の處（第五頁）で述べることにする。

## 3 生産性動詞

博愛之謂仁。行而宜之之謂義。韓愈原道

趙王成安君陳餘聞漢且襲之也。聚兵井陘口。號稱二十萬。史記淮陰侯列傳

於是伯夷叔成聞西伯昌善養老。蓋往歸焉。及至西伯卒。同伯夷列傳

の——は生産性動詞であつて客語——に對して歸著語を成す。

生産性動詞の生産性に對する客語は其の格は一般格であるがその運用は、日本語の生産格「何々と」と同様で生産格的である。之を生産の客語といふ。

一般の名詞は皆生産の客語になり得るが嚴密に言へば名詞のまゝでなるのではなく、模型動詞として生産の客語になるのである。

4 被動態の動詞 被動態の動詞は其の原動の主體を被動の客體とし、之を表はす語を被動の客語とし之に依據して歸著語を成す。そうして大抵はその依據性を

明にする爲に形式動詞の「於子乎」を用ゐる。唯語勢の急な場合だけ「於子乎」なしに直接に客語を取る。

三三

項王所過無不殲滅者。天下多怨百姓不親附。特劫於威彊耳。史記淮陰侯列傳

故不終其天年而中道夭。自培擊於世俗者也。莊子人間世七

故未終其天年而中道夭。於斧斤。此材之患也。同

松柏生於山林其始也困。於蓬蒿厄。於牛羊而其終也貫四時閱千歲而不改者其天定也。蘇東坡三槐堂銘

夫燕之所以不犯寇被甲兵以趙之爲蔽其南也。史記蘇秦列傳

右の最後の例は動詞が直接に客語を取る例であるが、こゝにいふことは甚だ少ない。5 使動態の動詞 使動態の動詞は他動態又は依據態として取扱はれ、原動の主體を使動の客語として之に歸著する。

夫以鳥養養鳥者宜栖之深林遊之壇陸浮之江湖食之鱸鮓隨行列而止。委蛇而處。彼唯人言之惡聞。奚以夫譏譏爲乎。莊子至樂五

東國有魯仲連先生者。今其人在此。勝請爲紹介交。之於將軍。史記魯仲連列傳

介子推至忠也。自割其股以食文公。莊子盜跖

自動性の動詞は右の例の様に他動の形式に於て使動の意を表はし、他動性の動詞は右の例の1の様によ據の形式に於て使動の意を表はすのである。

二、形式動詞 形式動詞の中歸著語となるものは次の二種である。

1 他動性なるもの

有客無酒有酒無肴。月白風清。如此良夜何。蘇東坡赤壁賦

既覆其族。延及于無辜之民。罔有子遺。同表忠觀碑

嘗讀孔子世家。觀其言語文章。循々莫不有規矩。同荀卿論

雖微商鞅。有不富彊乎。同論商鞅

或謂孔子曰。子奚不爲政。子曰。書云。孝乎惟孝。友于兄弟。施於有政。是亦爲政也。奚其爲爲政。論語爲政

秦之圍邯鄲。趙使平原君求救。合從於楚。史記平原君列傳

昨夜秋風入漢關。朔雲邊月滿西山。更催飛將追驕虜。莫遣沙場匹馬還。唐詩選七嚴武軍城早秋

これらは名詞動詞性名詞もを客語とする。——はその客語である。名詞を客語とする他動性の形式動詞は歸著形式動詞(第三頁)の一部と修飾形式動詞「使俾遣」(第三頁)の三詞とである。

不識陽關路、新從定遠侯。黃雲斷春色、畫角起邊愁。瀚海經年別、交河出塞流。須令外國使、知飲月支頭。唐詩選三王維送平涼然判官

季路問事鬼神。子曰未能事人、焉能事鬼。論語先進

二公子將兵伐楚者、道絕不得歸。史記伍子胥列傳

智伯兼范中行而攻趙、不已。韓魏反之、軍敗晉陽、身死。高梁之東、遂卒被分。韓非子喻老一

老一

勇而不見、憚者貪也。信而不見、敬者好剽行也。荀子榮辱

無友不如己者、過則勿憚改。論語學而

これらは他動性であることは前の例と同じだが、唯他の動詞——を客語にする點が違ふ。

「使遣」などは動詞に對しては修飾するのみで動詞を客語にすることはない。「使平

原君求救」は「使平原君而求救」の意であつて、「使」は唯「平原君」を客語とするのみで、「求救」をば客語としない。「求救」をば「使」が修飾する。

2 依據性なるもの

顏淵死、顏路請子之車以爲之槨。論語先進

夫賢士之處世也、譬若錐之處囊中、其末立見。史記平原君列傳

夫高帝之視呂后、猶醫者之視毒也。蘇老泉高祖論

令秦來年復攻王、王得無割其內而媾乎。史記平原君列傳

閨中少婦不知愁、春日凝粧上翠樓、忽見陌頭楊柳色、悔教夫婿覓封侯。唐詩選七王昌齡閨怨

早被嬋娟誤、欲粧臨鏡慵、承恩不在貌、教妾若爲容。風陵鳥聲碎、日高華影重。年々越地名

越溪女、相憶採芙蓉。三體詩三杜荀鶴

是以不誘於譽、不恐於誹、率道而行、端然正己、不爲物傾側、夫是之謂誠君子。荀子

非十二子

これら皆依據性で「何々」にの意の客語——に對して歸著語となる。そうしてその

客語は名詞(動詞性名詞)である。

「爲之擲」の「之」は「之」である。「之」がと讀むのは誤である。(第三頁)

「若錐之處囊中」の直譯は「錐の囊中に處るに如たり」である。「の如し」が如しと讀むのは意譯だ。(第三頁)

「令教」は「令秦……」が秦に令して「天堦に教へて」である通り依據性だ。「使遣」ならば「使秦……」遣夫堦……」が秦を使つて「天堦を遣つて」である如く他動性だ。(第三頁)

「被見」は「被春風吹爲物傾側」が「春風に吹を被る」物に傾側と爲る「の意がある様に事物(春風、物)に對して依據性である。但し動作(吹、傾側)に對して「被」は他動性で「爲」は生産性だ。(第三頁)

「被爲見等被動を表はす形式動詞の下へ本動詞が附いて出來た連詞は一つの形式動詞ではなくて一つの連詞的本動詞である。其れを一つの被動態動詞と見た場合には第三頁の(4)が適用されるから下へ「於」を附けた上で客語を取り得る。

萬乘之國被圍於趙。史記魯仲連列傳

桓公之兵橫行天下爲五伯長卒見弑於其臣。韓非子十過

秦少出兵則晉楚不信也。多出兵則晉楚爲制於秦。史記穰侯列傳

次の様なのは動詞を客語として之に依據する。

扶蘇親始皇子。秦人戴之久矣。陳勝假其名。猶足以亂天下。蘇東坡始皇論

孟子曰。形色天性也。惟聖人然後可以踐形。孟子盡心上

蒨庭蕭瑟故人稀。何處登高且送歸。今日暫同芳菊酒。明朝應作斷蓬飛。唐詩選七王之漢送別

舜讓天下於子州支伯。子州支伯曰。予適有幽憂之病。方且治之。未暇治天下也。莊子讓王

これらが依據性であることは第三七—三〇頁に論じてある。

3 生産性なるもの

制在己曰重。不離位曰靜。韓非子喻老二

彼以煦々爲仁。子子爲義。韓愈原道

行盡江南數十程。曉風殘月入華清。朝元閣上西風急。都入長楊作雨聲。三體詩杜常

「曰爲作」の客語——は名詞を用ゐて作つた模型動詞であつて、何々との意である。

端然正己不爲物傾側。韓非子十二子

「爲」は「傾側」といふ動詞を客語としてゐる。そうして「傾側」の用法は生産格的である。試に「傾側」を名詞に直して「不爲物所傾側」として見れば「物の傾側する所とならず」となつて」との意味が有ることが分る。

三 前置詞 副詞の中、前置詞は客語を取つて歸著語となる。歸著語は客體に對する相對作用を表はすものである。作用の概念は狹義に解すれば皆敘述性が有つて、之を表はすものは動詞であるが、廣義に解すれば、敘述性が無くても苟くも客體に對して歸著的に考へられるものは作用と云ふことが出来る。その意味に於て前置詞も作用を表はすと云へる。

前置詞の有する歸著性には他動性のものと依據性のものとある。又前置詞性なる變態品詞は前置詞と同様な部分があるから歸著語になる。

1 他動性の前置詞

イ 曾子曰、以能問於不能、以多問於寡、有若無、實若虛、犯而不校。論語泰伯  
ロ 子曰、道之以政、齊之以刑、民免而無耻。同爲政

右の中の「以」は前置詞であつて下の「を」を客語とし之に對して歸著語を成し、その

上て下の「を」を修飾する。「以」は前置詞性動詞であつて「を」を客語として之に歸著語を成し、「と」共に連詞的動詞を構成する。

2 依據性の前置詞

イ 親於其身、爲不善者、君子不入也。論語陽貨

勢重者、人君之淵也。君人者、勢重於人、臣之間、先則不可復得也。韓非子喻老三

惟三月周公初于新邑、洛用告商王士。周書多士

ロ 子曰、由之鼓瑟、奚爲於丘之門。論語先進

門人不敬子路。子曰、由也升堂矣、未入於室也。同

兄弟鬩于牆、外禦其侮。左傳僖廿四

ハ 父母之於子也、愛之深、故其爲之慮事也精。蘇轍古今家範序

「未入於室」「入ること室に於てせず」の意、「鬩于牆」「鬩ぐこと牆に于てす」の意である。(第四頁)

右の「の」は「於」は依據性のある前置詞で下の「を」を客語とし之に對して歸著語を成し、その上て下の「を」を修飾する。「の」は前置詞性動詞で「の」は前置詞性動詞性名詞であるが、その前置詞性ある點を以てして下の客語に對して歸

著語になる。「於」が何れも依據性であるからその客語。は皆「何々に」の意がある。

李同遂與三千人赴秦軍。秦軍爲之卻三十里。史記平原君列傳

今臣新從秦來。而言勿予則非計也。言予之恐王以臣爲爲秦也。同上

征商自此賤丈夫始矣。孟子公孫丑下

由此觀之。怨耶非耶。史記伯夷列傳

鎬京。辟離自西自東自南自北。無思而不服。毛詩大雅文王有聲

趙王與樓緩計之曰。予秦地何如。毋予孰吉。史記平原君列傳

子罕言利與命與仁。論語子罕

秦之與魏。譬若人之有腹心疾。史記商君列傳

右の「」は前置詞「」は前置詞性の動詞(或は前置詞性動詞性名詞)である。何れも下の「」を客語とする。訓讀では其の依據性が不明確であるが、原文に於ては何れも依據性が有る。即ちその客語。は皆「何々に」の意である。「爲之は」之に爲つての意。「自此賤丈夫は」此の賤丈夫に自りての意、與樓緩は樓緩に對手させての意と思へば依據性が了解される。

#### 四 歸著性の形式名詞 形式名詞の中「與」及「暨」の三つは歸著性を有する。

江上之清風與山間之明月。蘇東坡赤壁賦

の「與」は日本の「および」の意が有るのみならず歸著語となつて下の「」を客語とする。その歸著する工合は前置詞の「與」と同様である。「及」暨も「與」と同様に用ゐられる。その用例は第三頁に出してある。

#### 動詞の歸著化

動詞が新に歸著性を帯びることを動詞の歸著化といふ。其の著しいものに時間的依據化、空間的依據化、原因的依據化、比較的依據化の四種が有る。

一 時間的依據化 凡そ動詞は時間に對しては非依據性である。それは動作と云へば必ず時間に依據するのであるから時間の觀念は概念となるまでもなく觀念のまゝして動作概念の中に含まれるからである。例へば「人死」花開と云へば、その動作は何れかの時間に行はれるには違ひないけれども、特に時間を考へなくてもその動作が考へ得られるから、時間が概念として動作から分化しないのである。

併し特に時間が動作から分化して一概念となり、動作が時間に依據して行はれることが認識された場合には、その動作は依據態に在るべき筈である。漢文には名詞に依據格といふ格がなく、一般格を以て依據格の働きをさせるのであるから、動詞を依據化させるには動詞の方に依據した記表がなければならぬ。そこで動作の觀念を分解して實質的意義と形式的意義との二つとし、動詞をして實質的意義を表はさしめ、別に「於」といふ前置詞性形式動詞を用ゐて形式的意義を表はさしめ、其の二つを連詞的動詞とする。「於」には明確に依據性があるから、その連詞的動詞は依據性である。そこで時間の名詞を客語に取る。例へば

噲之死於惠帝之六年天也。蘇老泉高祖論

夫功之成非成於成之日蓋必有所由起禍之作不作於作之日亦必有所由兆。同

管仲論

「死」だけでは非依據性であるが「死於」といふ連詞は依據性であるから「惠帝之六年」へ依據して之を客語とする。

二空間的依據化 凡そ動作は空間を豫想するものではあるが餘りに一般的で

あるために空間の觀念は客體概念として分化されない場合が多い。されば動詞はその本性としては空間に對しては非依據性である。併し特に依據化させて空間の概念へ歸著させる場合がある。矢張依據性を明確にする爲に「於」といふ形式動詞を用ゐることが多い。例へば

楚嘗與秦構難戰於漢中楚人不勝。史記張儀列傳

楚方急圍漢王於滎陽。同淮陰侯列傳

百里奚居虞而虞亡在秦而秦霸非愚於虞而智於秦也。用與不用聽與不聽也。同

戎伐凡伯于楚丘以歸。春秋隱七

楚莊王既勝狩于河雍。韓非子喻老一

併し語勢の急な場合には「於」なしにも依據化する。例へば

信復收兵與漢王會滎陽復擊破楚京索之間。史記淮陰侯列傳

漢王遣張耳與信俱引兵東北擊趙代後九月破代兵禽夏說闕與。同

項氏立懷王爲義帝徙都長沙迺陰令九江王布等行擊之其八月布使將擊義帝

追殺之郴縣。同

大王宜騷淮南之兵渡淮日夜會戰彭城下。同

智伯兼范中行而攻趙不已韓魏反之軍敗晉陽身死高梁之東。韓非子喻老一

この空間的依據化に於て「於」子なしに用ゐることは「於」子なしに依據性が明確な場合でなければならぬ。されば多くは他に客語の無い場合又は有つても「之」といふ形式名詞である場合に多く此の法が用ゐられる。例へば「圍漢王於滎陽」といふ様な場合は滎陽の他に「漢王」といふ客語が有るから「於」を除くことが少ない。併しそれが「之」であつて「圍之滎陽」ならば「於」を除いても依據性が明白である。

空間的依據化とは場所を客體とする言ひ方である。前例の客語は皆場所を表はす。日本の口語では之を修用語として「何々で」といふ。「身死高梁之東」は「高梁の東で死ぬ」である。前例皆漢中で「梁陽で」梁縣で「彭城の下で」と云ふ様に「で」と云へる。此等を事物的客語と混同してはいけない。「布法於天下」などは「天下へ」であつて「天下で」ではない。必ず「に」となり「で」とならないものは事物的客語(目的物)で「で」と云へるものは場所的客語である。事物的客語の方は「於」を舍てる場合が非常に多い。

三 原因的依據化 作用の概念の生成に對して原因の概念は必ずしも必要なも

のではない。例へば「人死」は原因を言はなくても意義が具備してゐる。併し特にその原因に重きを置く時はその作用を原因に依據させることが出来る。その場合には原因を表はす名詞を客語に取るのである。

千金之子不死於盜賊何者其身可愛而盜賊之不足以死也。蘇東坡留侯論

一朝臥病無相識三春行樂在誰邊。唐詩選二代悲白頭翁

四 比較的依據化 形容動詞が單に状態を表はす場合には意義が區分的であつて比較的でない。例へば「高低」は物の高さを「高」と「低」とに區分してその一方を表はすので「高」は「高」であつてその程度をば論じない。併し程度に注意した場合には「高」と云つてもその程度が種々違ふからその「高」は他の物に對する比較的概念であつてその比較の對手を客體として之に依據して始めてその程度が定められる。之を形容動詞の比較態といふ。矢張「於」子或は「乎」といふ形式動詞を附けてその依據性を明にする。

この用法は形容動詞だけではない。如何なる動詞でも程度的に考へた場合には皆比較態になる。



陳子禽謂子貢曰、子爲恭也、仲尼豈賢於子乎。論語子張

孔子曰、德之流行、速於置郵而傳命。孟子公孫丑上

罪莫大于可欲、禍莫大于不知足、咎莫大于欲得。老子下

莫見乎隱、莫顯乎微、故君子慎其獨也。中庸

貴以身於天下、則可以託天下、愛以身於天下、則可以寄天下。莊子在宥二

なる連詞的動詞は比較態であつて下の——を客語とする。この客語は、和訓では「何々より」と讀むが、原文では「於子乎」に對する客語であるから「何々に」の意である。直譯すれば「賢於子」は「子に尙賢る」「大于可欲は可欲に尙大なり」である。

形式名詞の「焉」は特に依據格「何々に」といふ格的意義の明確な語であるから「焉」を客語とする時は「於子乎」を用ゐない。

王曰、若是其甚與、曰、殆有甚焉。孟子梁惠王  
直譯すれば、これに尙甚しいである。

### 動詞前置詞の非歸著化

歸著性の有る詞は歸著性動詞でも前置詞(歸著性副詞)でも其の本性のまゝに用ゐれば客語を要するのであるが、何等かの事情に由つて客體の觀念が觀念のまゝに存して概念とならない場合には客語を要しないことになる。之を歸著性の詞の非歸著化と云ひ其の相を非歸著態といふ。非歸著化に特殊性と一般性との二種が有る。

### 特殊性非歸著化

特殊性非歸著化とは其の詞が連詞中に於ける或る特殊の立場に於てのみ行はれる非歸著化である。其れは次の五つの場合である。

一 歸著性動詞が「之」の媒介に因り(或は「之」なしにも)客體を表はす名詞へ續く場合

〔歸著態〕

我讀書

人飲酒

人往某處

〔非歸著化〕

我讀之書

人飲之酒

人往之處 (人往處)

日落<sup>△</sup>西山

日落<sup>○</sup>之西山(日落<sup>〓</sup>山)

美

右の例の上段の歸著性動詞は△を客語とし之に對して歸著語を成すが下段の〓は之と共に連體語を成し〓の上に從屬する。そうして客語は無い。〓の作用に客體が無いのではない。客體は有るのであるが上段の様に客體を自己に從屬せしめるのではなく下段の〓は之の力に由つて自分が連體語となり自分の方が自分の客體たる下〓へ從屬する。客體を統率すれば客語を以て客體を表はすが客體へ從屬して客體に統率されれば客語を以て客體を表はさずに統率語を以て客體を表はす。それだから客語は要らないのである。併し右の様な非歸著化は漢文では餘り用ゐずに多くは「所」といふ詞を用ゐて客體を表はす。

〔非歸著化〕

我讀之書

人飲之酒

人往之地

〔歸著態〕

我所讀書

人所飲酒

人所往地

〔歸著態〕

我所讀

人所飲

人所往

日落之西山

日所落西山

日所落

多くは上段の様に言はずに、中段又は下段の様に言ふ。この「所」は複性詞であつて形式副詞としての意義と形式名詞としての意義とを兼ねてゐる。「所」は形式副詞として「其れを其れに」の意味が有るから「所讀」に就いて言へば「所」を讀むである。「所」は「讀」の客體であつて「讀」へ從屬し「讀」が之を統率する。そうして同時に又「所」は形式名詞として「所」の意を有するから「所讀」は「讀む所」である。「所」としては「讀」へ從屬するが「所」としては「讀」の方が「所」へ從屬する。通常我々が讀むには「我所讀書」は「我が讀む所の書」であるが直譯的に云へば「私が其れを讀む所の書」である。「所」は「それ」の意として「讀」へ從屬して「讀」の客體を表はすが其れは名詞的意義としての「それ」をなす副詞的意義としての「それ」であるから「讀」に對して内包的客語である。「讀」は「所」の無い場合には非歸著態であるが「所」が有れば歸著態である。「所」の用法は第四九—四三頁に詳しく説いてある。

二 修用語たる歸著性動詞又は前置詞の下に、それに對する被修飾語が有つて、其れが形式副體詞「之」に對して「或は、之」なしに客體を表はす語へ續く場合

〔歸著態〕 〔非歸著化〕 〔歸著態〕

人飲酒而醉 人飲而醉之酒 人之所飲而醉者

人觀月而作詩 人觀而作詩之月 人之所觀而作詩者

人從師以學道 人從學道之師 人之所從學道者

右の例の上段の―は歸著性動詞の歸著態であつて客語△が有るが中段の―は非歸著化して客語を取らない。客體は客語とならずに被修飾語―となつてゐる。併しこれは多くは下段の様に言ふ。下段には「所」があつて内包的客語を成すから―が歸著態である。

〔歸著態〕 〔非歸著化〕 〔歸著態〕

以甲兵威敵國 以威敵國之甲兵 所以威敵國之甲兵

禍自口出 禍自出之口 禍所自出之口

爲子孫買美田 爲買美田之子孫 所爲買美田之子孫

我與人交 我與交之人 我所與交之人

右の上段の前置詞―は歸著態であつて客語△△を有するが中段の―は上段に於

て客語たりしものを被修用語―にするから非歸著態である。下段の―には客語「所」があるから歸著態だ。「所」はそれを「それ」の意である。

三當然の形式動詞「可足難易」の類及び被動の形式動詞「被爲見」の類の下に用ゐられて之に對して内包的客語となる動詞は、その客體が形式動詞の動作の主體と同じ物である時には客語を要しない。

曾日月之幾何而江山不可復識矣。 蘇東坡赤壁賦

悟已往之不諫知來者之可追。 陶淵明歸去來辭

雖然倫不足道也。 胡澹菴上高宗封事

夫魯難伐之國也。 史記仲尼弟子列傳子貢

君子學道則愛人小人學道則易使也。 論語陽貨

其遊諸侯見尊禮如此。 史記孟軻列傳驩衍

以爲不知己者詬厲也。 莊子人間世

其母被刑僇世々卑賤。 史記蒙恬列傳趙高

―には客語が無い。―の客體は「可足難易見被」の主體。と同一物である。

四 前置詞「以」が形式動詞「可足」の下に用ゐられ、動詞と共に「可足」に對して客語を成す場合に「以」の客語が「可足」の主體と同じ物であるならば「以」には客語が要らなす。

客新有從山東來者。曰蔡澤。……足<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>寄<sub>レ</sub>秦國之政。史記范雎列傳  
如<sub>レ</sub>彼等者無<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>與<sub>レ</sub>計<sub>レ</sub>天下事。同前布列傳

可以<sub>レ</sub>速<sub>レ</sub>而速<sub>レ</sub>。可以<sub>レ</sub>久<sub>レ</sub>而久<sub>レ</sub>。可以<sub>レ</sub>處<sub>レ</sub>而處<sub>レ</sub>。可以<sub>レ</sub>仕<sub>レ</sub>而仕<sub>レ</sub>。孔子也。孟子萬章下

「以」は之を以て「與」は之と與にの意であつて「之」は「足」可の主體と同じものである。

五 修飾形式動詞「得」は被修用語がその客語を表はすから常に客語がない。

天子將恃<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>以爲<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>恐<sub>レ</sub>。雖有<sub>レ</sub>百<sub>レ</sub>益<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>而問<sub>レ</sub>哉。蘇東坡龜鶴論  
故使人得<sub>レ</sub>而相<sub>レ</sub>。莊子應帝王五

間することを得るのである。相することを得るのである。

六 使動の形式動詞の下の動詞に使動の客語が有る時は形式動詞には客語が要らない。

求也爲<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>比<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>三年可<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>民。論語先進

子曰民可<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>由<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>不可<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>。同泰伯

「使民足」と言へば「民」が「使」の客語であるが「足」といふ使動態動詞が「民」といふ使動の客語を持つてゐるから「使」の客語は用ゐないのである。(第三七一三頁参照)

### 一般性非歸著化

一般性非歸著化はその詞の連詞又は斷句の中に於ける立場に關係のない非歸著化である。

一 其の詞の意義上客體が一定してゐるものは其の客體の觀念が殆ど注意されずに概念として獨立せず、その詞の中に含蓄される場合がある。そういう場合には客語が無い。

日出而作、日入而息、鑿井而飲、耕田而食。帝力何有<sub>レ</sub>於我哉。十八史略帝堯

魏齊大怒、使<sub>レ</sub>舍人<sub>レ</sub>答<sub>レ</sub>擊<sub>レ</sub>睢<sub>レ</sub>折<sub>レ</sub>脅<sub>レ</sub>擢<sub>レ</sub>齒<sub>レ</sub>睢<sub>レ</sub>佯<sub>レ</sub>死<sub>レ</sub>。卽<sub>レ</sub>卷<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>簣<sub>レ</sub>置<sub>レ</sub>廁<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>。賓客<sub>レ</sub>飲<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>醉<sub>レ</sub>更<sub>レ</sub>溺<sub>レ</sub>睢。

史記范雎列傳

飲むものは水、食ふものは飯、飲むものは酔ふものは酒と大體きまつてゐるから客語

はならぬのである。

二 特定の客體を考へない時は客語を用ゐなす。

夷吾束縛而曹羈奔陳伯里子道乞傳說轉鬻孫子臏脚於魏吳起收泣於岸門痛西河之爲秦卒枝解於楚公叔痤言國器反爲悖公孫鞅奔秦關龍逢斬萇弘分脰尹子襄於棘司馬子期死而浮於江田明幸射必子賤西門豹不鬪而死入手董安于死而陳於市宰予不免於田常范睢折脊於魏韓非子難言

これら——の動作はその時の君主或は權勢の人より受けた動作であるが特にその人を考へて云ふのでないから客語を用ゐない。(臏脚於魏の魏などは場所の客語であつて被動の客語ではなす)。

三 説話の續きの上から客體が決まつてゐる場合には客體が概念化せず済むから客語が要らなす。

蘇子曰増之去善矣不去羽必殺増獨恨其不早耳然則當以何事去増勸羽殺沛公羽不聽以此失天下當於此去邪曰否増之欲殺沛公人臣之分也羽之不殺猶有君人之度也蘇東坡范増論

以智說愚必不聽文王說紂是也故文王說紂而紂囚之翼侯彘鬼侯腊比干剖心梅伯醢韓非子難言

右の(四)は被動であるがその原動の客體は被動の主體と同じであるから客語がないのである。例へば翼侯彘は翼侯被紂王炙其身と云はなくても分る。

明君之於内也娛其色而不行其謁不使私請其於左右也使其身必責其言不使益辭其於父兄大臣也聽其言也必使以罰任於後不令妄舉其於觀樂玩好也必令之有所出不使擅進不使擅退韓非子八姦一

衰美之婦人事好色之丈夫則身見疏賤而子疑不爲後同備内一

右の——は使動被動の形式動詞である。「使令」は皆使之令之であるが「之」は判つてゐるから用ゐない。「見疏賤」は見疏賤於其夫であるが判つてゐるから客語を用ゐなす。

既而彌月不雨民方以爲憂越三月乙卯乃雨甲子又雨民以爲未足蘇東坡喜雨亭記常數從其下卿南昌亭長寄食數月亭長妻患之乃晨炊葍食食時信往不爲具食

史記淮陰侯列傳

漁父莞爾而笑鼓枻而去歌曰滄浪之水清兮可以濯吾纓滄浪之水濁兮可以濯吾足遂去不復與言。屈平漁父辭

右の『は前置詞である。』以爲與は以此兩爲韓信與屈原であるが前後の續きから判つて居るから唯觀念として以爲與の内部へ含まれて仕舞ふのである。於にはそらいふ用法がない様であるが于にはあると思ふ。

維鵲有巢維鳩居之之子于歸百兩御之。毛詩召南鵲巢  
などの「子」を通常こゝに或はゆきと訓ずるが私は「于」是の意で「子」の非歸著化であると思ふ。

四 副詞「自相」を戴く動詞は動作者自己を客體とする場合は客語を要しなす。  
一 經營天下五年卒亡其國身死東城尙不覺悟而不自責過矣。史記項羽本紀贊  
及羽背關懷楚放逐義帝而自立怨王侯叛已難矣。

世常說古今人不相及。韓愈送楊少尹序  
吾見上下交相賊以成此名也。歐陽修縱囚論

①は「自責己」「自立己」である。②は「今人不及古人」「上賊下下賊上」である。其れが客

體を分化させずに考へるから右の様にいふのである。

五 客體の概念が提示された場合は客體は提示語に由つて表はされるから客語は要らなす。  
車服不維刀鋸不加理亂不知黜陟不聞。韓文公送李愿序

子曰吾之於人也誰毀誰譽如有所舉者其有所試矣。論語衛靈公  
子曰義以爲質禮以行之孫以出之信以成之君子哉。同

篤信好學守死善道危邦不入亂邦不居天下有道則見無道則隱。同泰伯  
「不維不入」には「不維車服」「不入危邦」の様に又義以之には義以之の様に客語が有るのが當り前だがその客體「車服危邦義」が提示されてゐるから客語を用ゐない。

### 第三節 實質語と形式語

#### 實質關係の連詞

□實質語と形式語とが統合されて一つの連詞となる關係を實質關係といふ。

□實質語とは、相關係して共に一連詞を成す二成分の一方であつて、他の一方形式語の表はす形式的意義に對して實質的意義を表はし、他の一方をその連詞の代表部として自己は之に従屬するものである。例へば

入者主之、出者奴之。韓愈原道

遷固之史有是非而無賞罰。蘇老泉春秋論

足乎己無待乎外之謂德。韓愈原道

告子曰性猶杞柳也。孟子告子上

の——は實質語である。——なる語を形式語とし之に従屬して——なる連詞を構成する。

形式語は相關係して連詞を成す所の二成分の一方であつて他の一方實質語の表はす實質的意義に對して自己は形式的意義を表はし、他の一方を統率して其の連詞を代表するものである。例へば右の例の——の類だ。

實質語は前に置かれ、形式語は後に置かれる。

實質關係に尋常實質關係と對等實質關係との二種が有る。

尋常實質關係 實質語に對する形式語が單に形式的意義を表はすだけならば

二者の關係は尋常實質關係である。右に挙げた諸例は皆そうだ。

對等實質關係 □實質語に對する形式語が單に實質語の實質的意義に對する

形式的意義を表はすのみならず別に實質語と對等なる實質的意義をも表はす場合には二者の關係は對等實質的關係である。例へば

1 山高月小水落石出

2 山高月小水落石出處有人泛舟

3 山高月小水落石出則我知其既冬至

の——とは所謂對句であつて唯對等の關係である様に見えるが、其れは常識的の解釋であつて文法的の解釋ではない。文法上から言へば——は自己の力を以て自己の資格を定め、或は(1)の如く終止し、或は(2)の如く名詞に續き、或は(3)の如く假定的の意義を以て下の動詞へ續くなど全く自主的である。然るに——の方は自己の力を以て自己の資格を定めず、一に之を——に依頼して自己の意義の處置を——に一任してゐる。その意義が(1)の様に終止するか、(2)の様に名

詞へ續くか、<sup>(3)</sup>の様に假定的に動詞へ續くか等を——に一任してゐる。されば日本語で言へば——は<sup>(1)</sup><sup>(2)</sup><sup>(3)</sup>皆「小」と讀んで一定の形を取るが——の方は<sup>(1)</sup>「出づ」、<sup>(2)</sup>「出づる」、<sup>(3)</sup>「出づれば」といふ風に形が違ふ。——が若し<sup>(1)</sup>「小なり」、<sup>(2)</sup>「小なる」といふ形で——の如何に由つて「小なり」「小なる」「小なれば」の意になるのであるから——とは文法上同一の機能を有するものではない。

下の——は實質的意義と形式的意義とを表はすものである。上の——は唯實質的意義だけを表はし、形式的意義を表はさず下の——へ寄食して——の有する形式的意義へ自己を投ずるのである。そこで下の——の有する形式的意義は自己の實質的意義に對するのみならず上の——の實質的意義にも對することとなる。即ち——は自己に實質的意義が有りながら上の——に對しても形式語の役目をするのである。例へば子の有る女が里子を預かつた様なもので、その女の乳は我が子の爲の乳でありながら里子の乳をも兼ねることになり、——自己の有する實質的意義(實子)と——の有する實質的意義(里子)とはその形式的意義(乳)の媒介

によつて乳兄弟として對等の關係になる。但し——と——とが對等であるとは云つても、それは實質的意義の對等であつて形式的意義から言へば——は從屬語で——は統率語である。こういう實質關係を對等的實質關係として單純實質關係と區別する。

### 尋常實質語及び形式語の材料

**尋常實質語** 連詞中に於て尋常實質語となるものは名詞、動詞の一般格及び副詞の實質的用法に在るものである。そうして名詞、動詞、副詞の三種が實質的用法に在るかどうかは、其の詞自身には何等の標識がないから其の詞自身だけでは區別が出来ない。唯形式語と相關係することに由つて實質的用法であることが判り、形式語が無い場合にそうでないことが判るのである。

**尋常形式語** 連詞の中に於て尋常形式語となるものは單純形式名詞、單純形式動詞、單純形式副體詞、形式感動詞の四種である。此の四種は品詞別から云へば名詞、動詞、副體詞、感動詞の四種であるが、何れも單純形式詞である。



形式的意義を表はす各品詞には種々ある。

形式名詞……

單純形式名詞

寄生形式名詞

單純形式動詞

歸著形式動詞

形式動詞……

修飾形式動詞

被修飾形式動詞

寄生形式動詞

接續詞

形式副詞……

前置詞

修飾形式副詞

形式副體詞……單純形式副體詞

形式感動詞……單純形式感動詞

右の様に種々の形式性品詞が有るがその中連詞の中に在つて單純形式語となる

ものは單純形式性のものでだけである。その餘の形式性品詞は全く形式語にはならない。何となれば單純形式性の諸品詞は形式的意義を形式的意義とし實質的意義を實質的意義として取扱つて單なる實質語を求めらるものであるから形式語になるが、他の形式性の諸品詞は形式的意義を表はしても實質語を求めず何等か他の方法に由つて自己の形式的意義を實質化するからである。例へば「祖宗之業」の「之」は單純形式副體詞で「以兵爲凶器」の「以」は前置詞「歸著形式副詞」である。「之」は形式的意義を表はし「祖宗」は實質的意義を表はすものとしての取扱の上に各其の意義を表はしてゐるから「祖宗」は實質語で「之」は形式語である。「以兵」に至つては「以」は形式的意義を表はし「兵」は實質的意義を表はすにしても二者は實質と形式の關係で統合されずに「以」は歸著語として「兵」は客語として、作用と客體との關係を以て統合されてゐる。其れだから「以」は歸著語「兵」は客語である。例へば父が將校で息子が其の隊の兵卒であつた場合には軍隊では將校と兵卒との關係である。父子の關係は家庭の問題であつて軍隊では其れは通らない。そういふ譯で實質關係の連詞の中で形式語になるのは單純形式性の諸品詞だけである。

## 單純形式名詞

者「者はもの」ことの「善いのがあるなどの」又は「場合時」などの意を有する名詞である。そうして「者」を形式語とし其の上に在つて之に對して實質語を成すものは名詞動詞副詞の三つである。

イ 屈原者名平楚之同姓也。史記屈原列傳

ロ 生我者父母知我者鮑子也。同書晏列傳

イは名詞を實質語としロは動詞を實質語とするもので、此の用法は最も多く使はれる。イの者は「屈原の外延的意義を再示するもの」、ロの者は「生我」へ外延的意義を附加するものである。

ハ 然則儒墨楊乘四與夫子爲五果孰是邪。或者若魯遽者邪。莊子徐無鬼

昔周飢尅殷而年豐。今邢方無道諸侯無伯。天其或者欲使衛討邢乎。左傳僖十九秋

イの者は「副詞」或を實質語とする。「或」といふ意義に該當する所の「者」場合といふ意義即ち「或」といふべき場合である。「或」を「或」といふ副體詞に使ふことは漢文

にはない。どこまでも「或」は副詞である。

「昔者」「古者」「今者」「嚮者」「曩者」「頃者」などは「者」が「時」の意を有する用法でその實質語「昔」「古」……等は名詞である。「二者」「三者」「兩者」などの「者」は「もの」の意であるが實質語「二」「三」兩等は名詞である。

「所以知其當然者」などの様なものは上の「所……」といふ連詞的名詞が實質語を成すのである。

第二九頁の例「亡微者非曰必亡言其可亡也」の「亡微」の様なのは普通名詞の様だが、勿論普通名詞ではあるが、こゝでは單に言語としてその聲音を表はしたものであるから模型名詞(第三頁)である。

第三頁の例「何者」の「何」は模型動詞である。「何」といふ説話作用そのもの、模型動詞である。之を記號動詞に改めれば「何ぞや」といふとなる。「何者」は「何ぞや」といふ者は「の意であるから「何となれば」と譯するのである。

日本語のものは連體語を受ける。「我を信ずる者」の「信ずる」は連體格である。これから漢文の「者」をも連體語を受けると誤解する人が多いが、漢文の「者」は實質語を受

けるのである。「信我者」の「信」は連體格ではない。何等特殊の性質をも帯びない單なる用法である。之を實質的用法或は不定法といふ。直譯すれば「信我者は我を信ず者」とも言ふべきであらうか。

「者」の用例は第三—三三頁に澤山出てゐる。

等 「我等汝等張良陳平等」などの様に「等」は形式語となり上の名詞は實質語となり相與に一連詞的名詞を構成する。(第三頁參考)

與及暨 「我與汝我及汝我暨汝」などの様に用ゐる上の名詞を實質語とし、自己は之に對して形式語を成す。然るに自己の意義が不完備で歸著性が有るから自己は歸著語となつて下へ客語を取る。



「我與汝」の如く讀めば上段の如く解釋すべく「我與汝」の如く讀めば下段の如く解釋すべきである。直譯は甚だ困難である。「我および汝」といふとその實質關係はよ

く判るが客體關係が譯せない。「貴方と私」といふと客體關係はよく判るが實質關係が譯せない。已むなくば「我及び汝」と云はうか。其れにしても客語と歸著語が反對になる。尙第三五—三三頁の再讀を煩はす。

### 單純形式動詞

乎於于 「乎」は本來の單純形式動詞で「於于」は前置詞性の單純形式動詞である。

「於于」は前置詞たる場合もあるが此處では單純形式動詞たる場合をいふ。「乎於于」の三つは動詞を實質語とし、之に對して形式語となり、明確なる依據性を有する連詞的動詞を作るものである。例へば

秦聞甘茂人名在楚使人謂楚王曰願送甘茂於秦楚王問於范曄曰寡人欲置相於秦孰可。史記樛里子甘茂列傳

の「は」上の動詞——を實質語とし之に對して形式語となつてゐる。——だけでは依據性が稍不明確であるが「が」が有る爲に「——」なる連詞の依據性は甚だ明確である。そこで下の客語を統率する力が強い。

「乎於子」の用例は第四頁四六—四七頁四〇頁に澤山出してある。

「乎於子」は依據性を明確にするだけの用である。これが無くても依據性が明確であるならば必ずしも之を用ゐるには及ばない。

「乎於子」の取捨の規則は次の如くである。

一、依據性が本來明確な動詞であつて客語に唯一つ依據の客語が有る場合には「於乎」を附けないのが普通である。

今君處母望之世。則母望之主安可以無母望之人乎。史記春申君列傳

此皆乘至盛而不返。道理不居卑退處儉約之患也。同范雎列傳

觀其坐高堂。騎大馬。醇醇醴而飲。肥鮮者孰不巍々乎。可畏赫々乎。可象也。劉毅贊

孟子之後喪踰前喪。樂正子見孟子

吾之不遇魯侯。天也。天下之本在國。國之本在家。

獨秦能苦趙。乃遂入秦。實籩豆奉祭。祀俱賓客。

於是始皇問李信。上及太后下至大臣。

此等も特に依據性を明示して語勢を緩にする爲には「於乎」を用ゐる。

不入于楊。則入于墨。不入于墨。則入于老。不入于老。則入于佛。入于彼。必出于此。入者主之出者奴之。韓愈原道

本在於上。末在於下。要在於主。詳在於臣。三軍五兵之運德之末也。莊子天道四

榮辱之責在乎己。而不在乎人。韓非子大體一

齧缺問於王倪。四問而四不知。莊子應帝王

逐燕太子丹。至於衍水中。卒破得丹。史記白起王翳列傳

二、依據性の不明確な動詞は「於乎」を用ゐる場合が多い。

子貢南遊於楚。反於晉。過漢陰。見一丈人。莊子天地十一

勉也。汜若於夫子之所言矣。同天地十

子張曰。異乎吾所聞。論語子張

君子篤於親。則民興於仁。同泰伯

諸侯朝於天子。曰述職。述職者述所職也。孟子梁惠王

民怯於私闢。而勇於公戰。此王者之民也。史記范雎列傳

三動詞と依據の客語との間にまう一つ客語が在ると動詞の下の客語に對する依據性は直接なる場合よりは不明確になり易い。そういふ場合に「於乎」を用ゐることが多い。

謀勅干戈於邦内

明明德於天下

且欲發使於韓

戰敗則結怨於百姓

於是逐穰侯於關外

魏使須賈於秦

睢前日得過於魏相

公前以睢爲有外心於齊

四動詞の意義上客體が二つあり依據の客體が重く(大抵は人間である)他の客語が軽い(大抵は人間でない)ものに在つては依據の客語を動詞に直接ならしむれば「於乎」を用ゐなくても善い。

與人酒

借朋友錢

賜寵臣地

問行人前路

○は人て重く△は物て軽い。この場合若し依據の客語を他の客語より下に置くならば必ず「於乎」を要する。

與酒於人

借錢於朋友

賜地於寵臣

問前路於行人

依據の客體が軽く他の客體が重い場合には依據の客語を動詞に直接ならしむることなく必ず他の客語よりも下へ置くが、その場合には「於乎」は有つても無くても善い。例へば「移其民於河東」、「移其民河東」どちらも善い。その「於乎」の取捨は「三」「四」「五」「六」の規則に依る。

意義の重い軽いといふことに就ては私は反對に考へたいので尙説明を要する。この問題は第六一—八四頁で詳説することとしこゝでは略説に止めておく。

五動詞を依據化せしめて時間、空間、原因、程度に依據させた場合は「於乎」を用ゐるのが普通であるが語勢の急な場合には用ゐない。第三一—六六頁の再讀を煩はす。

六被動態の動詞に於ては「於乎」を用ゐた上で客語を取るのが當り前であるが稀に用ゐないこともある。第五四頁に詳しい。

被動が形式動詞「被見爲」等に由つて示された場合は被動は「人」を依據の客語とし動作(原動)を他動又生産の客語とするから此の場合に於ける「於乎」の取捨は四の法

則に由る。即ち

人爲盜賊殺

人爲殺於盜賊

どちらでも善い。(第三頁参考)

七客語が形式名詞「焉」である場合には「於」「乎」を用ゐない。即ち「於焉於之」と續くことはない。何となれば「焉」は他の名詞と違ひ客格であるから「於」なしに上の動詞が歸著語であることが明確である。

以自與 も前置詞であるが形式語となるのは前置詞性の形式動詞たる場合である。

人主不自刻以堯而責人臣以子胥。韓非子安危三

齊桓公飲酒醉遺其冠恥之三日不朝管仲曰此非有國之恥也公胡其不雪之以

政。公曰善。韓非子難二

六年春王正月公即位三月遂以夫人婦姜到自齊。春秋宣元

以君臣論之商君吳起大夫種其可願孰與閔天周公哉。史記范雎蔡澤列傳

願謂侯曰楚亦有平原廣澤游獵之地饒樂若此者乎楚王之獵何與寡人。同司馬相

如列傳

不如逃之無使罪至爲吳大伯不亦可乎猶有令名與其及。左傳

——は實質語で——は形式語である。そうして「以自與」は自己に客語——が有る。「以」は他動性で「自與」は依據性だ。

「與」は多く「孰」「何」(動詞)の下へ用ゐられる。一處にして「いづれぞ」と讀む。又稀には右の最後の例の様に普通の動詞の下へも用ゐる。その場合には「よりは」と讀むが前置詞でなくて前置詞性形式動詞である。

云 □「云」は本動詞にもあるが形式語となるのは單純形式動詞の「云」である。動詞「謂」「曰」の下又は模型動詞の下に用ゐる「謂」「曰」や模型動詞を實質語とし之に對して形式語となる。

子曰若聖與仁則吾豈敢抑爲之不厭誨人不倦則可謂云爾已矣。論語述而  
管仲有病桓公問之曰仲父之病病矣可不謂云至於大病則寡人惡乎屬國而可。  
莊子徐無鬼七

齊宣王欲短喪公孫丑曰爲君之喪猶愈於已乎孟子曰是猶或終其兄之臂

第三編 第二章 第三節 實質語と形式語

六三

子謂之姑徐徐云爾亦教之孝弟而已矣。孟子盡心

莊子曰、鯨魚出遊、是魚之樂也。惠子曰、子非魚、安知魚之樂。莊子曰、子非我、安知我不知魚樂。……子曰、女安知魚樂。云者、既已知吾知之而問我。莊子秋水十二

子曰、禮云、禮云、玉帛云、乎哉。樂云、樂云、鐘鼓云、乎哉。論語陽貨

①は「謂」又は「曰……」の下へ用ゐてある。即ち生産性動詞を實質語として之に形式語を成すのである。「謂」と「曰……」とは動作の實質的意義を表はし、「云」は動作の形式的意義を表はす。「謂ひ云ふ……」曰ひ云ふと訓ずべきものである。

②は模型動詞を實質語とし之に對して形式語を成す例である。「禮云」の「禮」は名詞であるがこゝでは名詞として用ゐたのではなく、人が禮といふ語を發する其の發聲作用として用ゐたので模型動詞である。之を記號動詞に改めれば「謂禮」或は「曰禮」である。だから「禮云」は「謂禮云」「曰禮云」と同義である。

「云」は上の生産性動詞、模型動詞に對して形式語を成すが、自己に「爾」といふ客語の有る場合がある。爾に對しては歸著語を成すのである。「爾」は代動詞であつて前言を指示するものである。

この「云」の用法は從來誤解されて來た様に思ふ。それだから第八九頁の説明と本項と重複する點の有るべきを知りつゝこゝでまた一寸説明した。對照を煩はしたうと思ふ。

來、得、盡、了 動詞を實質語にし其れに對して形式語になる。「論來」「說得」「說盡」「去了」などの様に使ふ。(第九頁參考)

### 單純形式副體詞

單純形式副體詞には「之」が有る。「日月之光」「日月之出」必「自東」などの「之」である。名詞の下に用ゐる上の名詞を實質語とし之に對して形式語を成す。「日月之光」に就いて言へば「日月」は實質語で「之」は形式語である。そうして「日月之」は連詞的副體詞となるが「之」はその連詞の代表部である。その用例及び用法は「之」の第一用法として第二五—二五九頁に出してある。

### 形式感動詞

形式感動詞は他詞の下に用ゐられ他詞を實質語とし之に對して形式語となる。形式感動詞の中音律的なる「兮」に對しては殆ど凡ゆる詞が實質語になり得る。換言すれば「兮」は連詞中の如何なる處へも投入し得られるのである。

「兮」以外のもの即ち思念的なる形式感動詞に對しては之に實質語たり得るものは一、終止的用法の語、二、連用的用法の語、三、喚呼態の語この三つである。

1 夫環而攻之必有得天時者矣然而不勝者是天時不如地利也。孟子公孫丑

2 其諫我也似子其道我也似父。莊子田子方

子知子之所不知邪曰吾惡乎知之。同齊物論

使子也而有レ用且得有レ此大也邪。同人問世

子路曰昔者由也聞諸夫子曰於其身爲不善者君子不入也。論語陽貨

3 子曰參乎吾道一以貫之曾子曰唯。論語里仁

——は實質語で——は形式語である。

形式感動詞の用例は第三卷一四二頁に澤山出してある。

形式感動詞より成る形式語は之を主觀的(或は感動的)形式語といふ。主觀的形式

語は主觀的には實質語よりも重要であるが客觀的には實質語の方が重要である。

### 對等實質語及び形式語の材料

連詞の中に在つて對等實質語となるものは對等態の動詞と對等態の名詞との二つである。そうして其れが對等態であることは對等形式語が有るから判るのである。

對等形式語となるものは對等實質語となるべき語と對等なる實質的意義を有する動詞名詞の對等形式態に在るものである。

月明星稀鳥鵲南飛。蘇東坡赤壁賦

洛陽處天下之中挾殺暈之阻當秦隴之襟喉面趙魏之走集蓋四方必爭之地也。

李文叔書洛陽名園記後

公卿貴戚開館列第於東都者號千有餘邸。同

齊桓公夜半不寐易牙乃煎熬燔炙調五味而進之。魯共公酒味色論

右は動詞より成る例であつて——は對等實質語で——はその對等形式語である。





攻之宜以二三十萬或三四十萬若

之を冒解すれば下の如くてある。



#### 第四節 修用語と被修用語

##### 修用關係の連詞

修用語と被修用語とが相統合されて一つの連詞を成す關係を修用關係といふ。修用語とは連詞の中に在つて他の成分に從屬しその運用を修飾する成分をいふ。被修用語とは連詞中に在つて修用語に由つて自己の意義の運用を修飾せられ修用語を統率してその連詞を代表する成分をいふ。例へば

晉文公得南之威三日不聽朝魯共公酒味色論

三日不聽朝同

同之爲人也擇乎庸得一善則拳々服膺而弗失之中庸

拳々服膺而弗失之同

沙邊雁鷺泊宿處蒹葭蔽唐詩選一常建西山

常隨去帆影遠接長天勢同

亭々碧流暗日入孤霞繼同

洲渚遠陰映湖雲尙明霽同

林昏楚色來岸遠荆門閉同

右の例の——は修用語で下の——はその被修用語である。そうしてその中の太字は各の代表部である。

修用語とは他語の用(運用)を修飾する語といふ意で大體從來修飾語と云つたものゝ中、連用的のものだけを指すのである。

修用語は屬性を表はすものである。併し唯副詞などの様に内包的意義の語よりのみ成る

のではない。名詞からも成立する。例へば「是日下雨」「是日」などはそうだ。こういうのは  
属性の意義を廣義に解して「是日」といふ時の概念を作用の属性概念と見るのである。

修用語といふことに對して注意すべき點が二つある。それは修用の「修」の意義と  
「用」の意義とである。

一、修用語は他語を修飾する語である。他語を補充するのではない。彼の容語と  
實質語と主語とは他語の意義の缺陷を補充する語であるから補充語である。例  
へば

儀狄作酒

明月出東天

の。○は下の「狄」に對する主語で、「月」は之に對する敘述語であるが敘述語は作  
用の主體の概念が缺けてゐる。その缺陷を補ふのが主語である。又右の「出」は歸  
著語で下の「天」は客語であるが歸著語はその作用の客體の概念が缺けてゐるから  
その缺陷を補ふのが客語である。

移其民於河東

論得甚好

の——は實質語で「移」は形式語である。形式語は實質的意義が不足してゐる。之

を補ふのが實質語である。

然るに修用語は主語客語實質語の三者と異なり、他語の意義の缺陷を補充するも  
のではなくて、唯他語の意義を詳しくするだけである。例へば

晉文公得南之威三日不聽朝

晉文公不聽朝

林昏楚色來岸遠荆門閉

楚色來荆門閉

右の上段の修用語——を除去して下段の様に云つても意味の成立を妨げない。  
唯詳密でないだけである。

二、修用語は他語の意義の運用を修飾するものである。意義其のものを修飾する  
のではない。大抵は動詞を修飾するが場合に由れば名詞を修飾することもある  
のである。このことに關しては第三頁の連名性副詞の條の再讀を煩はしたいと  
思ふ。

### 修用語の種類

修用語に平説的修用語、提示的修用語、斷句的修用語の三種がある。

### 平説的修用語

平説的修用語は他語の運用に對して平坦にその屬性をあらはすものである。例へば

人情已厭南中苦鴻雁ナシ那從北地來。唐詩選七王勃蜀中九日

北邙山上列墳塋萬古千秋對洛城。同七沈佺期邙山

閨中少婦不知愁春日凝粧上翠樓。同七王昌齡閨怨

忽見陌頭楊柳色悔教夫婿覓封侯。同上

の——の類である。——に對して平坦にその屬性を表はす。

### 提示的修用語

断定中に存する或る概念を抽出して特に是を提示し他語に對して修用語を成さしめたものを提示的修用語といふ。

〔客語〕

〔提示的修用語〕

不嗜酒不好色

酒不嗜色不好

我不嗜酒

酒則我不嗜

嗜酒又好色

酒亦嗜之色亦好之

右の例の上段の「酒色」は、作用の客體を作用の客體として表はすから、上の「嗜好」に對して客語である。「酒色」といふ實質的意義體と「嗜好」の客體として立つといふ形式的意義用との二面を持つてゐる。下段の「酒色」はこの實質的意義と形式的意義との兩面を一括して一つの實質と見之を抽出して特に提示する。これは日本語でいふと善く判る。

〔客語〕

〔提示的修用語〕

酒を嗜まず

酒をば嗜まず

上段の例は「酒」が實質的意義體を表はし「を」が客語としての形式的意義用を表はすから客語である。下段の例は「酒」といふ實質と「を」といふ運用とを一括して「酒を」といふ一つの實質と見る。だから下段の「酒を」は客語としての運用を持つてゐない。「嗜」といふ作用の客體たるものを客體と見ずに一つの事物と見て仕舞ふ。上段の

「酒を嗜まず」は「酒が」を「に由つて」嗜まずに關係するが、下段では「酒を」といふものが「は」に由つて「嗜まず」に關係し「を」は直接に「嗜まず」へ關係しない。今「酒」といふ概念を菓子に喩へ、をを其れを入れる箱に喩へると菓子酒は中味で箱をは容物である。人（嗜まず）は箱をを持つ。然るに菓子箱を更に風呂敷はて包むと人は風呂敷はを持つので箱をを持つのではない。風呂敷はといふ容物に對しては箱をも菓子酒も一處になつて菓子箱酒をといふ一つの實質である。漢文には「を」といふ助辭も「は」といふ助辭もないが、詞の運用如何に由つて「を」は「は」に等しい形式的意義がその詞の中へ含まれる。菓子箱ならば抱へなければならぬが風呂敷包ならば手に掲げられるといふ様に、その取扱が違ふ。「酒を」は「嗜まず」に對して客語であるが「酒を」は修用語である。同時に「酒を嗜まず」の「嗜まず」は歸著語であるが「酒は嗜まず」の「嗜まず」は非歸著化して歸著語でなくなり、被修用語になる。

提示的修用語は断定中の或る概念を提示して、下の語の運用を修飾する修用語である。説話者の思念から言へば断定中の或る概念が特に注意されて其れが抽出されて敘述の圏外に飛び出し主語、客語、實質語といふ様な特殊の立場を失つて單に修用語の資格となつて敘述へ從屬するものである。聽話者に對する效力から言ふと、断定の材料に對して豫め注意を深からしめる所以になる。提示的修用語(略して提示語)はその概念の提示され方に因つて題目語と單純提示語との二種に分たれる。

### 題目語

題目語は提示的修用語の一種であつて判断の對象を提示するものである。凡そ判断には必ず對象が有る。例へば花を觀て綺麗だと思ふのは判断であるが「綺麗だ」といふ判断に對して「花」は對象である。唯その對象が概念化されて言語に表はされる場合と直觀的觀念のまゝで概念にならなくて言語に表はされない場合とある。花の咲いたのを見て「花が咲いたな」と思ふのも判断であるが、其れは花の咲いた事實の直觀を對象として自己の頭の中の概念なる「花が咲いた」と比較してその對象と概念との一致を判定するのである。そういう場合には對象が言語に現れないから題目語はない。「花が咲いた」は断定ではあるが無題的断定である。

無題とは對象が無いのではない。題目語が無いのである。對象が言語に現れて「花は咲いた」花は綺麗だ「花が咲いた」ことは咲いたなどと云つた場合にはその斷定を有題的斷定と云ひ「花は花が咲いた」ことは「を」を題目語といふのである。題目語に三種有る。分説、合説、單説といふ。

- 1 酒則不飲                      酒は飲まず                      分説
- 2 酒亦不飲                      酒も飲まず                      合説
- 3 酒不飲                      酒飲まず                      單説
- 4 「不飲酒」                      「酒を飲まず」                      「平説」

の「酒は」は分説、の「は」は合説、の「は」は單説で何れも題目語である。主語でも客語でも實質語でもない。題目的修用語である。の「は」は題目語ではない(客語である)。  
一分説は事情の異なるものと分けて説くものである。「酒は飲まず」と云へば「酒」と他のことを分けていふのである。酒は飲まないが菓子や食ふとか運動はやるとかいふ風に分ける。分説は漢文では下へ副詞「則」を用ゐる。日本語では助辭「は」を附ける。

二、合説は事情の類似してゐるものと合せて説くのである。「酒も飲まず」と云へば「酒も飲まないが飯も食はないとか、酒も飲まないが能も無いと云ふ風に合せる。漢文では下へ副詞「亦」を用ゐ、日本語では助辭「も」を附ける。

三、單説は他と比較分合しない言ひ方である。「酒飲まず」は單に酒を題目にしただけて他物と比較してゐない。單説には特殊の記號はない。分説でも合説でもない題目語が即ち單説題目語なのである。題目語であつて「則」も「亦」もないならば「は」も「も」もないならば、それは、單説の題目語である。

分説、合説の題目語は「則」亦」が有るから明瞭である。併し「則」亦」は寄生形式副詞即ち接續詞であるから、日本の「は」も」の様な助辭よりは意義が重い。日本の「は」も」の様に軽く自由に附ける譯には行かない。よく「分合の意味が強い時にのみ使ふのである。それ故日本讀で「は」も」を添へて讀む場合に「則」亦」を用ゐずに單説題目語として言ふ場合が多い。例へば

微此二人則天下不歸漢而高帝乃木強之人而止耳。蘇老泉高祖論  
夫噲之罪未形也。惡之者誠僞未必也。同

吳起者衛人也。好用兵。史記孫子吳起列傳

昔三苗氏左洞庭右彭蠡。德義不修禹滅之。同

彼人也。予人也。彼能是而我乃不能是。韓愈原毀

の——などは日本語では「はも」を附けて分説又は合説を用ゐる所であるが漢文では單説を用ゐる。

題目語は縱令單説であつて「則亦がないまでも敘述の語の上に在るから下に在るべき客語と混同される恐れは先づ無い。例へば前例の「酒不飲」の「酒」は題目語で「不飲」の「酒」は客語である様に明別が有る。併し主語は上に在るから單説題目語は主語と混同し易い。けれども其れは意義の上から分けられる。日本語で「はも」を添へて讀むべきものは大抵は題目語であつて主語ではない。口語で「が」を添へて云ふべきものは主語であつて決して題目語ではない。「はも」と「が」を附けて見れば大抵分る。

單説題目語と次に説く單純提示語とは區別しにくい場合がある。しかし意義の工合に由つて大抵は區別がつく。

### 單純提示語

提示的修用語の二種、その一を題目語と云ひ、その一を單純提示語といふ。

單純提示語は、單に、特に注意されて提示されるもので、題目として考へられないものである。日本語で言へば「はも」が附かずに「だに」「さへ」「すら」「まで」「や」「か」「ぞ」などを附くものである。漢文では或は形式感動詞の「也」「乎」などを附け、或は副詞「且」「尙」「是」などを附け、或は唯前後の關係に由る。

舜大聖人也。後世無及焉。周公大聖人也。後世無及焉。是人也。乃曰。不如舜。不如周公。吾之病也。韓愈原毀

其於人也。曰。彼人也。能有是。是足爲良人矣。能善是。是足爲藝人矣。同

世之治也。諸侯閉ヒマツレバ。於天子之事。則相朝也。於是乎有享宴之禮。左傳成十二

開方事君十五年。齊衛之間。不容數日行。弃其母。久宦不歸。其母不愛。安能愛君。韓非子難一管仲

大小の提示語 提示語の有る斷句の中に更に小なる提示語の有ることがある。

其れは題目語の場合に多いのであるが、單純提示語の場合にも有るから大小の題目語と狭く云ふよりは大小の提示語と廣くいふ方が都合が善い。

威公聲不絶乎耳色不絶乎目。蘇老泉管仲論

帝之與王其號雖異其所以爲聖一也。韓愈原道

何者其君雖不肖而尙有老成人焉。蘇老泉管仲論

——は小提示語で其の勢力範圍は——だけであるが——は大提示語で其の勢力範圍は下の語の全體に及んでゐる。  
右の例の——と——の中聲色だけは單純提示語であるが他は皆題目語である。

### 斷句的修用語

斷句的修用語は斷句が實質化されて出來た修用語である。

奈之何民不窮且盜也。韓愈原道

獨夫之心日益驕固戍卒叫函谷舉楚人一炬可憐焦土。杜牧阿房宮賦

嗚呼滅六國者六國也非秦也。同

徹侯諸將皆言吾所以得天下者何項氏所以失天下者何。十八史略西漢

虞兮虞兮奈若何。同

の——はもと獨立的用法であつて其れ自身としては一度斷句となつて意味が切れて居るがそれが實質化され下の——に從來したものである。それは——はその意義が——に關聯して居るから一斷句たる資格を失ひその意義を一つの材料として下の語を修飾するのである。「奈之何の之」は下の「民不窮且盜也」を指し「可憐」は下の「焦土」たることを言ひ「嗚呼」は下の「滅六國者……」に就て嘆息する。——は上に在るから從屬化するのである。——は意味が不完備な語であつて下の——を聞いてから始めて完備するので、——だけ聞いた場合にはまだ完備しない。併し——が下に在る場合は從屬化しない。例へば

民不窮且盜與奈之何。

滅六國者也非秦也嗚呼。

といふ時は——も——も獨立の斷句であつて互に從屬しない。何となれば上の——は意義が完備してゐるから下の——を須たずに一斷句となる。下の——は



上の断句から生じた觀念の上に意義が完備するから矢張一断句になる。――は先に言はれると次の――を待つて共に一断句を成すが、後から言はれるといふと前の――に獨立されるから、残されて別の一断句になる。

### 平説的修用語の材料

連詞の中に用ゐられて平説的修用語となるものは名詞、動詞、副詞の三種である。

### 表示態名詞

表示態名詞の一般格は平説的修用語になる。

#### 一 事件の時の修用語

今年花落顔色改、明年花開復誰在。劉廷芝代悲白頭翁

一朝臥病無相識、三春行樂在誰邊。同

此日遨遊邀美女、此時歌舞入娼家。同公子行

壬戌之秋七月既望、蘇子與客泛舟遊於赤壁之下。蘇東坡前赤壁賦

朝進東門營、暮上阿陽橋。杜甫後出塞

□右の――は名詞の修用的用法であつて下の語に對して修用語を成すものである。こゝにいふのを副詞と思ふ人が有るが其れは誤である。動詞の意義を修飾するものを凡べて副詞と思ふのは料理を作つた人を料理人と思ふ類である。主婦も娘も料理を作るのである。唯専門の料理人でないだけだ。以下「三」「四」「五」「六」「七」皆名詞であつて副詞ではない。

#### 二 事件の時間的範圍の修用語

年々歲々花相似、歲々年々人不同。劉廷芝代悲白頭翁

古之士三月不仕則弔、故出鄉必載質。韓愈復上宰相書

#### 三 事件の回数の修用語

走馬西來欲到天、辭家見月兩回圓。今夜不知何處宿、平沙萬里絕人煙。唐詩選岑參

一年始有一年春、百歲曾無百歲人。能向花前幾回醉、十千沽酒莫辭貧。同八崔敏童

「百戰百勝」一敗「三拜」などの様に用ゐた基数詞は副詞であらうと思ふ。

#### 四 事件の場所の修用語

黃雲城邊鳥欲棲。歸飛啞々枝上啼。機中織錦秦川女。碧紗如煙隔牕語。李白烏夜啼

御史府中烏夜啼。廷尉門前雀欲棲。盧照隣長安古意

梁家畫閣天中起。漢帝金莖雲外直。樓前相望不相知。陌上相逢詎相識。同

李白一斗詩百篇。長安市上酒家眠。天子呼來不上船。自稱臣是酒中仙。杜甫飲中八仙歌

五 事件の方向の修用語

孤鴻海上來。池潢不敢顧。張九齡感遇

寂寞向秋草。悲風千里來。高適宋中

功名富貴若長在。漢水亦當西北流。李白江上吟

梁家畫閣天中起。漢帝金莖雲外直。盧照隣長安古意

青雀西飛竟不回。君王長在集靈臺。李商隱漢宮

六 事件の方法の修用語

天下溺。援之以道。嫂溺。援之以手。子欲手援天下乎。孟子離婁上

諸侯名士。可下以財者。厚遺結之。不肯者。利劍刺之。離其君臣之計。史記李斯列傳

高有大罪。秦王令蒙毅**治之**。同蒙恬列傳趙高

席不正不坐。鄉人飲酒。杖者出。斯出矣。論語鄉黨

天下莫汝爭功。尙書虞書大禹謨

「鄉人」は動作の對手を動作の方法として取扱つた語である。

七 事件の性質の修用語

今兩虎共鬪。其勢不俱生。吾所以爲此者。以先國家之急。而後私讎也。史記廉頗列傳

天下之患。最不可爲者。名爲治平無事。而其實有不測之憂。蘇東坡龜錯論

八 事物の種類の修用語

淮陰侯韓信 九江王英布 相國蕭何

聖人孔子 美人西施 經書論語

これは個體或は種に對し種類概念を以て其の運用を修飾するものである。『』は——に對して修用語を成す。名詞を修飾するから連體の様に見えるが、他語の概念の實體を修飾するのではないから、連體ではなくて連用であると思ふ。「淮陰侯韓信」は「淮陰侯之韓信」とは違ふ。「淮陰侯」は「韓信」といふ概念の運用に關して其

の種を註解するのである。

九 數量の材料の修用語

精兵百萬

地方五千里

車千乘

騎五千匹

書十卷

錢百貫

「精兵百萬の精兵は百萬の運用へ從屬するものであらうと思ふ。」「精兵之百萬」とは違ふ。私は之を連用てあらうと思ふ。

敘述態名詞

敘述態名詞は名詞が動詞の様に敘述性を帯びたものである。その方法格的用法は修用語になる。

子曰人而無信不知其可也。論語爲政

王 填然鼓之兵刃既接乘甲曳兵而走或百步而後止或五十步而後止。孟子梁惠

——は修用語で——は被修用語である。

動詞

動詞の方法的用法、狀態的用法、偶然的用法は修用語になる。(第百頁参照)

一 方法的用法の修用語 ——は修用語 ——は被修用語。

子曰過而不改是謂過矣。論語衛靈公

宋人有闕其苗之不長而揠之者芒々然歸謂其妻曰今日病矣予助苗長矣其子趨而往視之苗則槁矣。孟子公孫丑上

形式動詞の「而使俾令遣教得」の七詞は常に方法格であつて他の格はないから専ら修用語になる。

過而不改

趨而往

亦使後人而復哀後人 不得而知也

二 狀態的用法の修用語 ——は修用語 ——は被修用語。

一身爲輕舟落日西山際常隨去帆影遠接長天勢。唐詩選一常建

秋氣集南瀾獨遊亭午時廻風一蕭瑟林景久參差。同柳宗元

去國魂已遠。懷人淚空垂。同上

東林氣微白。寒鳥勿高翔。我亦自此去。北山歸草堂。杪冬正三五。日月遙相望。同崔曙

三 偶然的用法(拘束的用法の中)の修用語

南登碣石館。遙望黃金臺。丘陵盡喬木。昭王安在哉。霸圖悵已矣。驅馬復歸來。唐詩  
選一陳子昂

梁王昔全盛。賓客復多才。悠悠一千年。陳迹惟高臺。寂寞向秋草。悲風千里來。同  
高適

拘束的用法、放任的用法は偶然的用法の外は提示的修用語になる。

副詞

副詞は「則」を除く外は全部平説修用語になり得る。

イ 王嘗語莊子以好樂。孟子梁惠王下

敢問所安。曰姑舍是。曰伯夷伊尹何如。曰不同道。同公孫丑上

□ 王之好樂甚。則齊國其庶幾乎。同梁惠王下  
イナカカラム

今夫天下之人。牧未有不嗜殺人者也。同上

△ 不義而富且貴。於我如浮雲。論語述而

子謂韶。盡美矣。又盡善也。同八佾

△ 將軍魏武之子孫。於今爲庶爲清門。唐詩選二杜甫

不以智累心。不以私累己。韓非子大體

齊人有謂王曰。河伯大神也。王何不試與之遇乎。同內儲說上

\* 子曰。君子和而不同。小人同而不和。論語子路

父子不相見。兄弟妻子離散。孟子梁惠王下

』は何れも修用語である。(ウ)は本副詞、(イ)は代副詞、(ク)以下は形式副詞だ。(ハ)は接

續詞、(ニ)は前置詞、(ホ)は修飾形式副詞だ。前置詞の下のは前置詞の客語である。

修用語の中述名性副詞より成るものは例へば「朋友若父母」などいふ様に名詞の運用を修飾するものが有ることを忘れてはならない。(第三頁)

副詞の中「則」は常に提示的修用語になる。平説修用語にはならない。「亦」は兩方になる。

副詞の中補充性副詞は修用語になる場合と主語又は客語になる場合とあり得る。副詞は必ず修用語になるとはいへない。(第三頁参考)

六五

### 提示的修用語の材料

提示的修用語は其の提示され方に由つて單純提示語と題目語との二つに分たれることは前(第三頁)に言つた通りであるが、又その提示の材料の如何に因つて之を五種に分つ。

主體の提示語……我則不暇  
客體の提示語……亂邦不居  
提示的修用語實質の提示語……山上有山歸不得  
屬性の提示語……必也仁乎  
判斷の提示語……美則美矣

### 主體の提示語

主體の提示語は作用の主體を提示した修用語である。

問、花が咲きましたか。

答、花は咲きました。

この答の「花は」は問の中から作用の主體の概念「花が」だけを抽出して之を提示して自己の答の修用語にしたものである。答の「花は」は主語ではない。主語は「花が」又は「それが」でなければならぬ。即ち

花はそれが咲きました

であるが、「それが」は判つてゐるから觀念のまゝで概念化せずに「咲きましたの中へ含まれて仕舞つて語に現れない。「花は」は解説の題目であつて作用の主語ではない。唯偶作用の主と同じ事物を表はすだけだ。

主體の提示語となるものは名詞と不定副詞の「或」と接續詞の「則亦」である。

一名詞の一般格 主語となるべき名詞を實質化して之を提示して修用語とするのである。

子曰……柴也愚、參也魯、師也辟、由也嘑。論語先進

第三編 第二章 第四節 修用語と被修用語

六六

子曰、回也其庶乎、屢空。同

六

子貢曰、師與商也、孰賢、子曰、師也過、商也不及、然則師愈與、子曰、過猶不及。同

堯舜之傳賢也、欲天下之得其所也、禹之傳子也、憂後世爭之之亂也。韓愈對禹問

堯舜傳之賢、禹傳之子。同

然則禹之賢不及於堯與舜與。同

若伯夷叔齊者、窮天地、互萬世而不顧者也。韓愈伯夷頌

道者萬物之與善人之寶也。孝子下

右は主體の單純題目語である。(1)は「也」があつて提示が明確である。(2)は別に記號なしに提示されてゐる。日本語では「は」を附けて言ひたい所だが漢文ではさういふ助辭がないから何も附けない。「者」は形式名詞であつて提示の記號ではな

王順、長息則事我者也。孟子萬章

子貢方人、子曰、賜也賢乎哉、夫我則不暇。論語憲問

聶曰、曩者吾與論劍、有不稱者、吾目之、試往、是宜去、不敢留、使使往之主人、荆鄉則已駕而去、榆次矣。史記刺客列傳荆軻

刑之不濫、君之明也、臣之願也、淫刑以逞、誰則無罪。左傳僖廿三

右は主體の分説題目語で下に「則」が有る。

疑問詞は普通は題目語にならない。日本語でも「誰が来た」とは云ふが「誰は来た」といふことは特殊な場合だけである。併し「誰かは来る」とはいふ。右の例の最後の例の「誰則無罪」は漢文では稀な例である。「誰か則ち……」と讀むが「誰かは則ち罪なからむ」と讀むべきものである。

聖之教人、射必志於毅、學者亦必志於毅、大匠誨人、必以規矩、學者亦必以規矩。孟

子告子上

須臾客去、予亦就睡。蘇東坡赤壁賦

の——は合説題目語で下に「亦」が有る。

方六七十如五六十、求也爲之比、及三年、可使足民。論語先進

赤也爲之小、孰能爲之大。同

彼陷溺其民、王往而征之、夫誰與王敵。孟子梁惠王上

人生得意氣、功名誰復論。唐詩選一鶴徵

第三編 第二章 第四節 修用語と被修用語

六

任人有問屋廡子曰禮與食孰重曰禮重色與禮孰重曰禮重。孟子告子其如是孰能禦之。同梁惠王上

然則夫子既聖矣乎曰惡是何言也……夫聖孔子不居是何言也。孟子公孫丑上子貢曰惜乎夫子之說君子也。駟不及舌。論語顏淵

且家人父子尚不能以此自克況為君臣者乎。柳子厚桐葉封弟辨

蓋聞中國有至仁焉德洋而恩普物靡不得其所今獨曷為遺己舉踵思慕若枯旱之望雨豔夫為之垂涕況乎上聖又惡能已。史記司馬相如列傳

昔高帝以六十萬衆困於平城當此之時猛將如雲謀臣如雨然七日不食僅乃得免況當陵者豈易為力哉。李陵答蘇武書

右の——は單純提示語である。(4)は下に「也」があつて提示たることを明示する。

(4)は疑問の不定名詞である。漢文の辯として疑問の語は動詞の上に在ると提示される。「誰與王敵は誰が王と敵する」と平調にいふのなら「誰」が主語になるがこれは「誰かは王と敵せむ誰がさ王と敵しませうぞ」といふ風に「誰」が提示される。日本の文語では「誰か」と「か(清音)を付けていふ。(5)には記號はないが「すら」だもの意を含

んでゐる。(2)には上に副詞「且」尚況などが有る。

「況」を戴く語は自己の下に在るべき統率語の觀念を含んで仕舞つて自己が一動詞化する場合が多い。右の例の(1)——などがそうだ。「豈能以此自克哉」の意を含んでゐる。

「況」の訓 況の訓いはむやは動詞の反轉態云はむやである。下へ「を」を付けるが「を」は他動格の助辭「や」は感動の助辭である。「況や我をや」は「我を云はむや」の倒置である。併し漢文の「況」が副詞であつて千年以上も其れを「いはむや」と讀んで來たのであるから動詞たりし「いはんや」は今日ではいつしか副詞化してゐる。古人が「況」の「いはむや」といふ訓を發見するまでに嘗めた苦心は一通りではなかつたらうと思ふ。私の推測では古人は色々の訓をつけて見て最後に孟子の萬章上の最末の

萬章問曰或曰百里奚自鬻於秦養牲者五羊之皮食牛以要秦繆公信乎。孟子曰否不然……自鬻以成其君鄉靈自好者不為。而謂賢者為之乎。

〔趙注、人自鬻於汙辱而以傳相成立其君鄉黨邑里自喜好名者尚不肯為也。況賢人肯辱身而為之乎。〕

の——などから「謂はんや」に到達したものだらうと思ふ。「謂賢者為之乎」は注に示す通り「謂

を況に代へても意義が通ずる。唯況は副詞で下を修飾し、謂は動詞で下を統率する點が違ふだけである。

六六

二 副詞 補充性副詞の「或何奚惡安」等は主體の提示語になる場合がある。

填然鼓之兵刃既接棄甲曳兵而走或百步而後止或五十步而後止。孟子梁惠王上  
今大王誠能反其道任天下武勇何所不誅以天下城邑封功臣何所不服以義兵  
從思東歸之士何所不敢。史記淮陰侯列傳

飲且食兮壽而康奚所望。韓愈送李愿序

生陽也無自也而果然乎惡乎其所適惡乎其所不適。莊子寓言四

顧安所得酒乎。蘇東坡赤壁賦

「或」は「或るもの」の意である。「何奚」は「何かは」の意、「惡乎安」は「何處かは」の意である。「何物かは王の誅せざる所なる」、「何事か望なる何處か適する所なる何處か酒を得る所なる」と解すべきである。

三 「則亦」 接續詞の「則」は常に提示語になる。「亦」も多くは提示語になる。「併し則」亦は唯提示すべき概念の内包の形式的意義を表はすだけで實質的意義をば表は

し得ない。

夫我則不暇

予亦就睡

に就いて言へば「我」も提示語「則」も提示語である。「予」も提示語「亦」も提示語である。「我予」は實質的提示語で「則亦」は形式的提示語である。「則亦」はその上の實質的提示語の意義を形式的に再示するに過ぎない。

形式感動詞「也」は提示の記號にはなるが、上の語と別々の提示語にはならない。

回也其庶乎。

に就いて言へば「回」は實質語「也」は形式語で「回」と「也」と兩方が合體して提示語になる。何となれば「也」は單純形式語であつて「則」や「亦」の様な寄生形式語ではない。「回也」に於ける「回」と「也」とは實質關係を以て統合され「回也」は一つの連詞である。「回則……」とすると「回」と「則」とは何等直接の統合關係はなく別々に下の「……」へ關係する。

### 客體の提示語

作用の客體の概念を表はす語は歸著語に對して其の客體概念の缺陷を補填する



400  
場合は客語であるが、單に提示された場合は客語ではなくて客體を提示する修用語である。

イ 吾不得而見聖人矣。

ロ 聖人吾不得而見之矣。論語述而

ハ 聖人吾不得而見矣。

④の「聖人」も③の「聖人」も「見」の客體である。④の「聖人」は「見」の客體を「見」の客體として取扱つてゐるから「見」に對する客語であるが、③の「聖人」は「吾不得而見聖人」の中から「見」の客體概念なる「聖人」を抽出し、その跡は「之」を代入して「見」の客語たらしめ、抽出した「聖人」をば「見」の客語とせず、その判断の題目として之を提示してゐる。故に④の「聖人」は提示語である。客體の提示語である。⑤でも「聖人」が提示語である。⑥の「見」は客語を有たないが、それは上に客體提示語「聖人」が有るから、之に由つて客體の概念が出来て居り、その概念は概念化されるに及ばずして「見」といふ概念の中へ含蓄され之に因つて「見」の意義は具備してゐる。

日本語では客體の提示語は一般格を用ゐる場合と客格を用ゐる場合とある。

聖人は吾見ず

亂邦は居らず

粥だに啜らず

聖人をば吾之を見ず

亂邦には居らず

粥をだに啜らず

上段は一般格で下段は客格である。

漢文では一般の名詞は一般格を用ゐる。唯「之」は一般格が無いから客格を用ゐる。客體の提示語となるものは名詞と補充性副詞と接續詞「則」亦である。接續詞の「則」と「亦」とは形式的意義だけを表はすものであるからその提示の効果は名詞などから成る提示語と合體して現れる。例へば「酒則不飲」「酒亦不飲」に就いて言へば「則」も「亦」も客體の提示語であるが形式的提示であるから上の實質的提示語「酒」と合體して提示的效果を表はすのである。

客體提示語と之を受ける被修用語との關係に二種有る。假に之を直接、間接と名づけよう。

### 直接客體の提示語

孟獻子百乘之家也。有友五人焉。樂正襄、收、仲、其、三人則予忘之矣。孟子萬章

飲食之人則人賤之矣。為其養小以失大也。同告子上

克伐怨欲不行焉。可以為仁矣。子曰：可以為難矣。仁則吾不知也。論語憲問

子貢問於孔子曰：夫子聖矣乎。孔子曰：聖則吾不能。孟子公孫丑上

子曰：禹吾無間然矣。論語泰伯

子曰：篤信好學守死善道。危邦不入。亂邦不居。天下有道則見。無道則隱。同泰伯

善人吾不得而見之矣。得見有恒者斯可矣。同述而

仲父家居有病。既不起。此病政安遷之。韓非子十過過而不聽

右の——は題目語である。之を直接客體の提示といふのは下の被修用語の代表部の表はす作用の客體の提示だからである。例へば一番始の「其三人則予忘之」の「三人」は「忘」の客體である。

車服不維。刀鋸不加。理亂不知。黜陟不聞。大丈夫不過於時者之所為也。韓愈送李愿序

園日涉以成趣。門雖設而常關。陶淵明歸去來辭

婦人見之請於父母曰：與人為妻。寧為夫子妾者十數而未止也。莊子德充符四

豎刁自猿以為治內其身。不愛又安能愛君。韓非子十過過而不聽

人之情莫不愛其子。今蒸其子以為膳於君。其子弗愛。又安能愛君。同

子曰：吾之於人誰毀誰譽。如有所譽者。其有所試矣。論語衛靈公

公曰：寡人有子。未知其誰立焉。左傳閔二

其三師者專行。不獲聽。而無上衆誰適從。同宣十二

子夏聞之曰：噫。言遊過矣。君子之道孰先傳焉。孰後倦焉。論語子張

桀溺曰：……子路行以告。夫子憮然曰：鳥獸不可與同羣。吾非斯人之徒與。而誰與。同微子

子曰：子欲無言。子貢曰：子如不言。則小子何述焉。子曰：天何言哉。四時行焉。百物生焉。天何言哉。同陽貨

行官自南迴過吉州。得吾兄二十四日手書數番。忻悚兼至。未審入秋來眠食何似。伏惟萬福。韓愈與孟尚書書

王曰：德何如。則可以王矣。孟子梁惠王

子貢問曰：鄉人皆好之。何如。子曰：未可。論語子路

文侯問李克曰吳起何如人哉。史記孫子吳起列傳

九方歆曰相也為祥子綦瞿然喜曰奚若曰相也將與國君同食以終其身。莊子徐無鬼

惡乎然於然惡乎不然於不然惡乎可於可惡乎不可於不可。莊子齊物論

苑風曰子將奚之曰將之大壑曰奚為焉。同天地

天有歷數地有人據吾惡乎求之。莊子寓言四

今朝廷可謂不和矣其咎安在。蘇東坡擬進士對御試策一道

\* 獸相食且人惡之為民父母行政不免於率獸而食人惡在其為民父母也。孟子

梁惠王

豎刁自宮以治內人情莫不愛其身自且不安能愛君。韓非子難一管仲

竊人之財猶謂之盜況貪天之功以為己力乎。左傳僖廿四

寡人唯是一二父兄不能供億其敢以許自為功乎。同隱十

大哉堯之為君也巍巍乎唯天為大唯堯則之。論語泰伯

天下大悅而將歸己視天下大悅歸己猶草芥也唯舜為然。孟子離婁

甚矣人之好怪也不求其端不訊其末惟怪之欲聞。韓愈原道

凡去就出處何常惟義之歸。同送石處士序

先君奉此子也而屬諸子曰此子也才吾受子之賜不才吾唯子之怨。左傳文七

寡人之使吾子處此不唯許國之為亦聊以固吾圉也。同隱十

公山弗擾以費畔召子欲往子路不悅曰未之也巳何必公山氏之之也。論語陽貨

備々焉惟不得出大賢之門下是懼。韓愈復上宰相書

齊侯曰豈不穀是為先君之好是從與不穀同好如何。左傳僖四

己則不明而殺人以逞不亦難乎民不見德而唯戮是聞其何後之有。同僖廿三

詩云戎狄是膺荆舒是懲則莫我肯承無父無君是周公所膺也。孟子滕文公下

子女玉帛則君有之羽毛齒革則君地焉生之。左傳僖二十三

周桓公言於王曰我周之東遷晉鄭焉依善鄭以勸來者猶懼不蔑況不禮焉鄭不來焉。左傳隱七

吾文王之為子武王之為弟成王之為叔父。荀子堯問

子使漆彫開仕對曰吾斯之未能信論語公治長

所謂誠其意者毋自欺也如惡惡臭如好好色此之謂自謙大學

居天下之廣居立天下之正位行天下之大道得志由之不得志獨行其道富貴不

能淫貧賤不能移威武不能屈此之謂大丈夫孟子滕文公下

吾子孫其覆亡之不暇而況能禮祀許乎左傳隱十

今民各有心而鬼神乏主君雖獨豐其何福之有君姑修政而親兄弟之國庶免韓非子十過食復

糧食匱財力盡士大夫羸病吾恐不能守矣欲以城下何國之可下韓非子十過食復

可欲之謂善有諸己之謂信充實之謂美孟子盡心

谷神不死是謂玄牝玄牝之根是謂天地之根老子上

右は單純提示語である。皆客體を表はすものでありながら客語と違ふ點は動詞の下に置かれずに上に置かれてゐる。

(4)は最も單純な提示である。單に動詞の上に置かれることを以て提示であることが示される。

(4)は形は(4)と同様であるが言外に或る意義例へば副詞「且」などの意義を含む。日本語では「すらだに」などを附ける。

(4)は(4)と同様であるが疑問の不定名詞である。日本語では提示を示すために「か」を附ける。

(4)も(4)と同様であるが疑問の不定副詞である。日本では「何をか何々か或は何ぞ」といふ様に「かぞ」を添へて提示の記號とする。「何似何如奚若」などは皆「いかん」と讀むが漢文の意義は「何にか似る」「何にか如る」「奚にか若る」である。

(4)は文字の位置の客體關係と變ることは提示語全體に共通なことであるがこれは其の上に下へ副詞「且」などを用ゐる。

(4)は上に限る意味の副詞「唯」「惟」「獨」「必」「特」などがある。日本語で「し」「ぞ」などを添へるのはこれと同じ精神である。

(4)は「——」の下に「之」「是」「焉」が有つて「——」の意を再示する。(4)を兼ねることが多い。

(4)の「之」を用ゐるのは「これ」と指して前言を再示するのである。これは日本の「ぞ」「こそ」に似てゐる。「ぞ」「其れ」「の」「そ」であり「こそ」「は」「此れ」「其れ」「の」「こそ」を重ねたものである。矢張前言を再示

するのである。

惟怪之欲聞

唯怪をぞ聞かまく欲りする

此之謂大夫夫

此れをこそ大夫夫とは云ふなれ

と云つた様に善く一致する。そうして漢文では提示の爲に文字の位置が顛倒し、日本語では下の動詞の語尾が變る。唯漢文の「之」は形式名詞であるが、日本の「ぞ」こそは代名詞から轉じて助辭となつてゐる。

「何如の二種と如何」 □何如と如何は違ふ。そうして「何如」には二種ある。今假に比較の「何如」單獨の「何如」と名づける。

一比較の「何如」 前頁に挙げた「何如」は皆單獨の「何如」であつて比較の「何如」ではなから。比較の「何如」は二物を比較して「何れか如る」といふ意を表はす。「孰若」と通ずる。

趙王與樓緩計之曰予秦地何如イヅレカシム母予孰吉ナキニ 同平原君列傳虞卿

趙王因以括爲將……其母上書言於王曰……今括一旦爲將東向而朝軍吏無敢仰視之者王所賜金帛歸藏於家而日視便利田宅可買者買之王以爲何如其父父子異心願王勿遣ナカニ 史記廉頗列傳趙奢

與其有譽於前孰若無毀於其後與其有樂於身孰若無憂於其心イヅレカシム 韓愈送李愿序

「何如は、いかに」と読み、孰若は「いづれぞ」と讀む習慣であるが、文法より言へば兩方とも「何れか如く孰れか若く」である。「何孰」は主體的提示語で「如若」はその被修用語である。且つその「如は、如してはなく如くまざる」である。右の例の「は、如若」の客語だ。「何孰」は「如若」に對して主體を表はす。この比較の「何如」は「如何」とはならない。「何が」如の主體であつて客體ではないからだ。

二單獨の「何如」と「如何」 單獨の「何如」は單に状態の疑問であつて二物を比較する意はない。「何にか如る」の意で「何が」如の客體である。主體ではない。「如は、如くまざる」ではなくて「似る」如してである。第七三頁に挙げた「何如」は皆この單獨の「何如」である。





嗟嗟保介維莫之春亦又何求如何新金 毛詩周頌臣工

如何の同義語に「奈何奈知若那」がある。皆「いかん」と読み、副詞にも動詞にもなる。

雖有神禹且不能知吾獨且奈何哉 莊子齊物論三

君曰吾箭已足矣奈無金何 韓非子十過食復

晴烟漠々柳絲々不那 離情酒半酣 唐詩選八韋莊古別離

民有不若德不聽罪天既孚命正厥德乃曰其如台 商書高宗彤日

天曷不降威大命不摯今王其如台 周書西伯戡黎

鄉國扶桑外主人孤崑中別離方異域音信若爲通 王維送秘書監歸日本

「奈何」は重語であつて「奈に何ん」である。「奈無金何」は「金無きを奈にし何にせむ」である。「如若」は「如し若して」であるが形式動詞であるから場合に由ると實質化して「如是」の意とも「如何」の意ともなる。

比較の「何如」は「何が主體の提示であるから提示をやめても主體である以上「如」の下へ置いて「如何」といふことは出来ない。「如何」となるのは「何が客體である場合に限るのである。

### 間接客體の提示語

□作用から観てその代表部の客體を直接客體と云ひその從屬部の客體を間接客體といふ。例へば「人と與に政治を論ず」の「與に政治を論ず」は一の作用であるが「論ず」は代表部で「與には從屬部である。そうして「政治は代表部「論ず」の客體で「人とは從屬部「與」の客體である。誠に當り前のことで難しいことではないが、その客體が提示される段になると面倒な問題になつて来る。提示されない場合は「人とは唯「與」へ關係するだけで「論ず」へは關係しないが「人」とが提示されると單に「與」へ關係するだけでなく「與に論ず」の全體へ關係して行く。何となれば客語と歸著語との關係は客觀的關係の直觀に過ぎないが、提示語と被修用語との關係は思惟的關係である。「某氏人と與に政治を論ぜず」といふことは客觀的存在である。「某氏人とは與に政治を論ぜず」といふことは人間の頭の中のもののみ存する。「は」を付けて提示するといふことは思念の上の取扱である。されば提示語は「與」といふ様な直觀的な語(敘述性なき語)へは關係しない。必ず思惟的な語即ち「論ず」といふ

敘述的詞へ關係する。

直觀的關係

1 私の處へ 來る 人は無い。……………客體關係

思惟的關係

2 私の處へは、來る人が無い。……………提示關係

直觀的關係

1 明けて 見む ところ思ひし箱崎の波間に霞む松の村立平説修用關係

思惟的關係

2 明けてこそ、見むと思ひし 箱崎の波間に霞む松の村立提示關係

漢文にも間接客體の提示がある。

直觀的關係

1 士大夫之去位而巷處者 與 何人共嬉遊……………客體關係

思惟的關係

2 士大夫之去位而巷處者 誰トカ與ニ嬉遊……………提示關係

この(四)を「誰と與にか」と讀む習慣であるが、それは意譯である。直譯は「誰とか與に」である。

提示語

1 誰と與にか 嬉遊せむ

與何人乎嬉遊

客語 歸著語

誰とか 與に嬉遊せむ

誰與嬉遊

提示語

修用語 被修用語

漢文の構造は(一)の場合よりは(四)の場合が多い。之を明示する例がある。

今一以天地爲大鑪以造化爲大冶惡乎往而不可哉 莊子大宗師十

道惡乎隱而有真僞 同齊物論三

寡人惡乎屬國而可 同徐無鬼七

これらが「惡くに往きてかてなくて「惡くにか、往きて可ならざらむ」の如く讀むべきものであることは「乎」の位置で判る。然らば「誰與」の如く前置詞が名詞の下に在るものは名詞が提示されてゐるものであることは想像に難くないと思ふ。今次へ古文の例を擧げる。



義以爲質禮以行之孫以出之信以成之君子哉論語衛靈公  
晉人使以幣如鄭問駟乞之立故駟氏懼駟乞欲逃子產弗遣請龜以下亦弗予左傳昭十九

今如此避而不擊後有夫者何以加之史記淮陰侯列傳

鄭國不天寡君之二三臣札瘥天昏今又喪先大夫偃其子幼弱其一二父兄懼隊宗主私族於謀而立長親左傳昭一九

令尹子瑕言厥由於楚子曰彼何罪諺所謂室於怒市於色者楚之謂也舍前之忿可也乃歸厥由同

魏犢顛頤怒曰勞之不圖報於何有同僖二八

晉卻芮使夷吾重賂秦以求入曰人實有國我何愛焉入而能民士於何有從之同僖九

貧賤也衣食於奔走不得朝夕繼見韓愈與陳給事書

百姓足君孰與不足百姓不足君孰與足論語顏淵  
噫微斯人吾誰與歸范文正公岳陽樓記

顏淵死子哭之慟從者曰子慟矣曰有慟乎非夫人之爲慟而誰爲論語先進

\* 日居月諸東方自出父兮母兮畜我不卒毛詩邶風

秦襄王病百姓爲之禱病愈殺牛塞禱郎中閻過公孫衍出見之曰非社臘之時也奚自殺牛而祠社怪而問之韓非子外儲說右下

人問曰將軍於若子如是尙何爲而泣對曰吳起吮其父之瘡而父死今是子又將死同外儲說左上

書曰湯一征自葛始天下信之東面而征西夷怨南面而征北狄怨曰奚爲後

我民望之若大旱之望雲霓也孟子梁惠王  
抑此皇父豈曰不時胡爲我作不卽我謀微我牆屋田卒汙萊毛詩小雅節南山十月之交

曷爲久居此圍城之中而不去史記魯仲連列傳

柳下惠爲士師三黜人曰子未可以去乎曰直道而事人焉往而不三黜枉道而事人何必去父母之邦論語微子

其措兵於寡人也必矣吾安居而可韓非子十過食復

右の例の(イ)より(ウ)までは前置詞「以於與爲自」の客體の提示である。前置詞の客體の提示であつても提示された以上は前置詞と關係せず、下の動詞へ關係する。(ハ)は形式動詞「爲」の客體を提示してゐる。「奚爲胡爲曷爲」は皆「なんすれど」と讀む習慣であるが、文法上は「何をか爲て」である。

(ウ)は本動詞の客體の提示である。第七頁の「惡乎」と同様である。右の例の(イ)の「……以」の日本讀は直譯になつてゐる。

イ 義、以爲禮  
提示語 被修用語

義、以て禮と爲す  
提示語 被修用語

「義を以て」と讀まない。「以ては」之を以ての意だ。然らば(ウ)以下も直譯は

私族、於謀  
提示語 被修用語

私族に於に謀る  
提示語 被修用語

孰、與不足  
提示語 被修用語

孰とか、與に足らざらむ  
提示語 被修用語

夫人、之爲働  
提示語 再提示 被修用語

彼の人に之れ爲に働す  
提示語 再提示 被修用語

\* 東方、自出  
提示語 被修用語

東方、自り出づ  
提示語 被修用語

奚、爲後我  
提示語 被修用語

何しか爲て我を後にする  
提示語 被修用語

焉、往而不三黜  
提示語 被修用語

何處にかは往きて三たび黜けられざらむ  
提示語 被修用語

の如くてなければならぬ。讀むには何と讀んでも、心持はそういふ心持でなければ原文の構造が判らない。

「私族於謀」衣食於奔走などは從來倒句と稱して「謀於私族」奔走於衣食の顛倒だと解したが、これは文法的解釋ではないと思ふ。凡そ倒置法は倒置する必要なしに倒置するのではない。「謀於私族」を何の必要が有つて顛倒して「私族於謀」とするのがあるか。又そんなめちや／＼な顛倒が出来る譯がない。私はこれは倒置法ではないと思ふ。唯客體を提示したのに止ると思ふ。若し通俗的に倒置といふ語を用ゐるならば「私族於謀」は「於私族謀」を倒置したものだと云ひたい。倒置法のこと  
は尙第六九頁に述べる。

### 實質の提示語

實質の提示語は作用の概念の實質部が特に注意された場合に其れが形式部を表はす語に對して提示語となるものである。

イ 域民不以封疆之界、固國不以山谿之險、威天下不以兵革之利。孟子公孫丑下

ロ 不域民以封疆之界、不固國以山谿之險、不威天下以兵革之利。右改作

イ 君子易事而難說也、說之不以道、不說也。論語子路

ロ 不說之以道、不說也。右改作

イ 桓公九合諸侯、不以兵車、管仲之力也。論語憲問

ロ 桓公不九合諸侯、以兵車。右改作

右の(イ)の——は提示語であつて其の下の語は之に對する被修用語であるが、之を改作した(ロ)の——は實質語である。そうしてその下は形式語になる。

イ 此非有國之恥也、公胡其不雪之以政。韓非子難二

ロ 公胡其雪之、不以政。右改作

イ 夫既己用天下之虛名而不較之以實。蘇東坡蓄材用

ロ 較之、不以實。右改作

右の例は前と反對に(イ)が實質語で之を改作した(ロ)の方が提示語である

右の例の(イ)(ロ)はどちらでも意義は通ずるが提示すればその概念が特に注意せられ提示しなければ單に材料となるのだから、意義の工合は大變違つて來るのである。

右の例に於て提示語と實質語との區別は副詞「不」の位置に由つて定められる。「不」だけではない其の他の副詞例へば「已」「未」「或」「將」等でも又形式動詞「可」「宜」等でも同様である。

そういうものが無い時には提示が現はれない。例へば

陽春召我以煙景、大塊假我以文章

の——は提示にならない。唯「也」を用ゐて

陽春召我也、以煙景、大塊假我也、以文章

とすれば——が提示語になる。併し

陳涉之得民也。以項燕扶蘇。項計之與也。以立楚懷王孫心。而諸侯叛之也。以弑義帝。蘇東坡范增論

の——の様なのは動詞性名詞であつて主體的提示語である。實質の提示語ではなす。こゝろいふのとは區別されなければならぬ。

### 屬性の提示語

屬性を表はす語であつて提示されない場合に平説的修用語たるべきものは提示されると屬性の提示的修用語となる。

1 受牒之明日在使院中。韓愈上張僕射書

2 將受命之日則忘其家。史記司馬穰苴列傳

の(1)の——は平説修用語であるが(2)の——は提示されて提示語になつてゐる。接續詞の「則」は常に提示語である。例へば右の例の(2)の「則」の類である。前言——に寄生し其の意義を自己の實質的意義とする。前言が提示語であることは「則」に因つて明確になるので前言——も「則」も兩方とも提示語である。「則」は前言を再示

するに過ぎないもので前と同じ事柄を表はすのである。

接續詞の「亦」は提示語になることは勿論であるが、平説修用語たる場合もある。

1 有朋自遠方來。不亦樂乎。論語學而

2 居廟堂之高則憂其民。處江湖之遠則憂其君。是進亦憂。退亦憂。范文正公岳陽樓記

(1)の「亦」は平説修用語で(2)の「亦」及びその前言——は提示語である。

屬性の提示語といふ場合に於ける「屬性」とは單に内包的概念のみを指すものでないことは第七頁に言つた通りである。

屬性の提示語となるものは名詞、動詞、副詞の三種の連用的用法に在るものである。連體的用法及び獨立的用法に在るものは屬性の提示語にならない。

### 一名詞の連用的用法

樂歲粒米狼戾。多取之而不爲虐。則寡取之。凶年糞其田而不足。則必取盈焉。孟子

滕文公

何日平。胡虜良人罷遠征。唐詩選一李白

胡塵一起亂天下。何處春風無別離。同一薛業

衆罔兩問於景曰若向也俯而今也仰向也括而今也被髮向也坐而今也起向也  
行而今也止何也。莊子寓言五

冬日則飲湯夏日則飲水然則飲食亦在外也。孟子告子上

其爲體也筆最銳墨次之硯鈍者也豈非鈍者壽而銳者夭乎其爲用也筆最動墨  
次之硯者靜者也豈非靜者壽而動者夭乎。唐子西古硯銘

### 二 動詞の連用的用法

物必先腐也而後蟲生之。蘇東坡范增論

仕不爲貧而有時乎爲貧。韓愈爭臣論

非獨政能也及其姊亦烈女也。史記刺客列傳聶政

荆軻雖游於酒人乎然其爲人沈深好書。同刺客列傳荆軻

萬章曰君餽之粟則受之乎曰受之受之何義也曰君之於氓也固周之曰周之則  
受賜之則不受何也曰不敢也。孟子萬章下

豈不曰以位則子君也我臣也何敢與君友也以德則子事我者也奚可以與我友。  
孟子萬章下

今王割河東而講三國歸王必曰三國固且去矣吾特以三城送之不講三國也入  
韓則國必大舉矣王必大悔王曰不獻三城也臣故曰王講亦悔不講亦悔。韓非子內  
儲說上

動詞の拘束的用法及び放任的用法は常に提示である。例へば

不憤不啓不悱不發舉一隅不以三隅反則不復也。論語述而

子謂南容邦有道不廢邦無道免於刑戮以其兄之子妻之。同公冶長

苟くも「ば」どもの意のある處は皆提示である。「則」亦が有れば題目語になるが  
「則」亦がなければ單純提示になる。

### 三 副詞(前置詞)

聞人足跣然而喜矣又況乎昆弟親戚之譽歎其側者乎。莊子徐無鬼一

且也若與予也皆物也。同人問世

苟正其身矣於從政乎何有。論語子路

費惠公曰吾於子思則師之矣吾於顏般則友之矣王順長息則事我者也。孟子萬章  
燕將見魯連書泣三日猶預不能自決欲歸燕已有隙恐誅欲降齊所殺虜於齊甚

衆恐已降而後見辱。喟然嘆曰：「與人刃我，我寧自刃。乃自殺。聊城亂，田單遂屠聊城。歸而言魯連，欲爵之。魯連逃隱於海上，曰：『吾與富貴而誦於人，寧貧賤而輕世肆志焉。』」

史記魯仲連列傳

丘不與化爲人，不與化爲人，安能化人。莊子天運八

子貢曰：「如有博施於民而能濟家，何如，可謂仁乎？」子曰：「何事於仁，必也聖乎！堯舜其猶病諸。」論語雍也

### 判斷の提示語

□判斷の提示語は既に一度行はれた判斷を再判斷する爲に提示する所の題目である。

吾々は一度判斷したその判斷の價値を更に判斷する場合がある。人が庭を見て「花が咲いた」と云つたとする、この「花が咲いた」は客觀界に於ける花が咲いたことと、その人の心内に於ける「花が咲いた」といふ概念とを比較してその相一致することを判斷したのである。然るに更に語を繼いで

花が咲いたことは咲いた。併しまだ少ない。

と云つたとする。これは判斷の再判斷である。一度「花が咲いた」と判斷し、更にその判斷の誤りてないことを判斷したのである。——は第一回の判斷を一つの概念として之を題目にしたものである。——はその再判斷である。この——の様なのを判斷の提示語といふ。漢文でも

庭中之花開則開矣。唯憾其甚鮮耳。

などいふのである。

若子之論直則直矣。無乃傷于德而費於辭乎。韓愈爭臣論

堯曰：「吾不敖無告，不廢窮民，苦死者，嘉孺子而哀婦人，此吾所以用心已。」舜曰：「美則美矣，而未大也。」莊子天道六

美矣而未大也。莊子天道六

定公問於顏淵曰：「子亦聞東野子之善馭乎？」顏淵對曰：「善則善矣，雖然其馬將失。」

荀子哀公

右の「直」「美」「善」は判斷そのものを一概念化して之を題目化したもので即ち判斷の提示語である。その下の「則」「是」「直」「美」「善」を受けて提示的概念を再示するもので此れも

矢張こゝでは判断の提示語である。——は實質的提示語で「則」は形式的提示語で二者相須つてその提示が明確になる。

□併し場合に由つては「則」だけで上の——が無くても意義の通ずる場合がある。例へば

恢然如天地之苞萬物。如是則賢者貴之、不肖者親之、如是而不服者則可謂詿怪  
狡猾之人矣。雖則子弟之中、荆及之而宜。荀子非十二子

芄蘭之支、童子佩觿。雖則佩觿、能不知容兮。遂兮、垂帶悸兮。芄蘭之葉、童子佩鞶、  
雖則佩鞶、能不我甲。容兮、遂兮、垂帶悸兮。毛詩衛風芄蘭

魴魚頰尾、王室如燬。雖則如燬、父母孔邇。毛詩衛風芄蘭 同周南汝墳

「雖則子弟之中」は「子弟の中」は則ち子弟の中なりと雖も「雖子弟之中則子弟之中」の義、雖則佩觿は「觿を佩ぶることは則ち觿を佩ぶ」と雖もの義、雖則如燬は「燬くが如きことは則ち燬くが如し」と雖もの義である。従來は「雖則如燬」を「王室は則燬くが如し」と雖もの義と解した様であるが、そうではないと思ふ。

判断の提示語は必ず判断の題目語である。判断の單純提示語といふものはな

様である。

判断の提示語は判断そのものゝ提示である。他の三種即ち主體の提示語、客體の提示語、屬性の提示語は判断の材料の提示である。

### 斷句的修用語の材料

□斷句的修用語は獨立性の語が從屬化して修用語となつたものである。斷句的修用語となり得るものは、一、實質感動詞、二、喚呼態名詞、三、指示態名詞、四、敘述態名詞、五、動詞、この五種である。何れも一度獨立して一斷句となつたものゝ從屬化である。

### 實質感動詞

實質感動詞は本來獨立して一斷句を成し得るものである。例へば、人が驚いて「あら！」と叫び、困つて「あゝあ」と嘆息し、呼ばれて「はい」と答へる様なのは皆それだけで主觀的表現の一斷句である。漢文にもそういうふことはある。

子桑戸死未葬。孔子聞之。使子貢往待事焉。或編曲或鼓琴。相和而歌曰。『嗟來桑戸乎。嗟來桑戸乎。而已反其真。而我猶爲人。』子貢趨而進曰。敢問臨尸而歌。禮乎。二人相視而笑。莊子大宗師十一

節彼南山有實其猗。赫々師尹不平。謂何天方薦瘥。喪亂弘多。民言無嘉。慴莫懲。嗟。毛詩小雅節南山

の「猗嗟」などはそうだ。自己だけで獨立終止して一斷句を成すのである。勿論意義が主觀的であるから、感動詞だけでは概念は分らないが、前言又はその場合の實情に因つて間接に意味が具備する。併し前言に従屬するのではない。前言は既に前言だけで斷句を成してゐる。

感動詞は獨立終止すべき語であるが主觀的の語であるから、引き續いて概念性の語が發せられる場合が多い。

嗚呼、公卿大夫方進於朝。放乎一己之私自爲之。而忘天下之治。忽欲退享此得乎。  
李文叔書洛陽名園記後

嗚呼、在信而不肯自憂。又禁他人使皆不得憂。可嘆也夫。韓愈讀李翱文

於虜當其周時未至。殷祀未殄。比干已死。微子已去。向使紂惡未稔。而自斃。武庚念亂以圖存。國無其人。誰與興理。柳子厚箕子碑

王若曰。猷。大誥爾多邦。越爾御事。弗弔。天降割于我家。不少延。洪惟我幼沖人。  
周書大誥

抑此皇父。豈曰不時。胡爲我作。不卽我謀。徹我牆屋。田卒汙萊。毛詩小雅節南山十月之交

の——は感動詞で、續いて——の語が發せられる。——とは同じ觀念である。唯——は主觀的に思念そのものを表はし、——は客觀的對象を豫想する概念を表はすだけの相違で、同じものを兩方面から表はしたものである。——は主觀的表現としては獨立終止するが、——の事柄に就いての主觀的表現であるからその斷定に對しては從屬である。そこで——は——の主觀的狀態を表はすものとして——の運用を修飾する。矢張修用語の一種として——を被修用語にする。

### 喚呼態名詞

喚呼態名詞はその本來の性質から言へば其れ自身だけで一斷句を成すものであ



る。例へば學生が教師を呼んで「先生」と云へばその「先生」はそれだけで一斷句である。併しこれも文語では大抵續いてその用事をいふ語を用ゐる。

求爾何如……赤爾何如……論語先進

蕓兮蕓兮風其吹女叔兮伯兮倡予和女。毛詩鄘風蕓兮

の——は名詞の喚呼態より成る斷句的修用語で——はその被修用語である。「求よ」は獨立性は有るが「爾は何如」といふ問を發する爲に呼びかけたのであるから、その問の語の對手を示すものとして——に從屬する。

「兮」は「蕓」に對して形式語で「蕓は兮」に對して實質語である。「蕓兮」といふ連詞が下の——に對して斷句的修用語となる。

### 指示態名詞

指示態名詞も本來は獨立性が有る。

澧水橋西小路斜日高猶未到君家村園門巷多相似處々春風枳殼華。三疊詩雍陶  
千里鶯啼綠映江水村山郭酒旗風南朝四百八十寺多少樓臺烟雨中。同一杜牧

の——などがそうだ。上の語を統率して共に一斷句となる。併し多くの場合には從屬して下の語に對して修用語となる。右の例の——もそうだが。

黃雲城邊鳥欲棲歸飛啞々枝上啼。唐詩選二李白

露冕行春向若耶野人懷惠欲移家東風二月淮陰郡惟見棠梨一樹花。三疊詩一劉

商送元史君

蒲萄美酒夜光杯欲飲琵琶馬上催醉臥砂場君莫笑古來征戰幾人回。唐詩選七李白

十里黃雲白日曛北風吹雁雪紛紛莫愁前路無知己天下誰人不識君。

の——などもそうだ。下の——はその被修用語である。

### 敘述態名詞

敘述態の名詞は動詞と同様獨立終止して斷句の代表部となるべきものである。例へば「臣是酒中仙」は一斷句であつてその代表部「酒中仙」は敘述態名詞である。併し從屬化して斷句的修用語となる場合がある。

イ 正是華時節、思君寢復興。市沽終不醉、春夢亦無憑。嶽面懸清雨、河心走濁水。東門一條路、離恨正相仍。三體詩三變說

ロ 相如擁傳有光輝、何事闌干淚溼衣。舊府東山餘妓在、重將歌舞送君歸。唐詩選八武元衡

一 官何幸、得同時。十載無媒獨見遺。今日莫論腰下組、請君看取鬢邊絲。同八包何

ハ 誰家玉笛暗飛聲、散入春風滿洛城。此夜曲中聞折柳、何人不起故國情。同七李白

右の——は自己として終止的であるが、何を敘述してゐるかと言へば下の——に就いて敘述するのである。イの——は下の——の事件の時を敘述する。ロの「何事ぞ」何事なるかは下の——に就いて、闌干として涙衣を濕すとはそも何事なるかといふのである。ハの——は「暗に聲を飛ばすのは誰が家の玉笛ぞ」といふのである。併し——は下の——を主語として之を統率するのではない。——へ從屬して——の運用を註するのである。だから獨立が從屬化される。——を被修用語とする修用語である。

### 動詞

動詞は獨立して斷句の代表部となり得べきものである。例へば「月出風清」は各一つの斷句であつて「出清」はその代表部である。

併し之を從屬化して用ゐる場合がある。

一 接續性從屬 一旦意義の終止したものを更に下へ從屬させるのである。

子言則然矣、宰相則知子矣。如時不可何。韓愈復上宰相書

當般之亡周、與微子賢也。抱祭器而去之。武王周公聖也。從天下之賢士與天下之

諸侯而往攻之。同伯夷頌

其在彼邪、亡乎我。在我邪、亡乎彼。莊子田子方十

王之弟當封邪、周公宜以時言於王、不待其戲而賀以成之也。柳子厚桐葉封弟辨

——は一旦意義が切れて居るが、その意味の切れたものを再び一概念として下の——の事件の起る場合を表はすものとして取扱ふから——は——に對して修用語になる。

此の用法は名詞の指示態(第三頁)の場合と等しいものであらうか。  
二 喚呼性從屬

陽貨……謂孔子曰來予與爾言曰懷其實而遺其邦可謂仁乎曰不可。論語陽貨  
韓信謝曰先生且休矣吾將念之。史記淮陰侯列傳

——は一旦終止しても——の準備として——へ從屬する。この用法は名詞の喚呼態と等しいものであらうか。

三 感動性從屬

異哉其所憑依乃其所自爲也。韓愈雜說一

已矣乎寓形宇內復幾時。陶淵明歸去來辭

登彼西山兮采其薇矣。以暴易暴兮不知其非矣。神農虞夏忽焉沒兮。我安適歸矣。

子嗟徂兮命之衰矣。史記伯夷列傳

可憐楊柳傷心樹可憐桃李斷腸花。唐詩選劉廷芝

上曰若教淮陰侯反乎對曰然臣固教之。史記淮陰侯列傳

萬章曰堯以天下與舜有諸孟子曰否天子不能以天下與人。孟子萬章上

——は感嘆としては一旦終止してゐるが——に就て感嘆するのであるから——へ從屬する。

この用法は感動詞と同じ用法である。この用法は「甚矣先生之言也」の「甚矣」などは違ふ。これは「先生之言也甚矣」の倒置である。

四 歸著性從屬 歸著性の語が一旦終止してその客體に修用的に從屬するものである。例へば

一 臣願大王之執計之……大王の之を執計せむことを願ふ

二 大王願執計之……大王願はくは之を執計せよ

この「願」は歸著語であつて下の——を客語とする。——は從屬部で——が代表部である。然るに(一)の「願」は下の——に從屬する。——は代表部ではなくて——の方が代表部である。併し(二)の「願」は副詞ではない。矢張動詞である。動詞であるが副詞の様に下へ從屬する。動詞のこういう用法を歸著性從屬といふ。

一 君餽之則受之而不識其可常繼否也。(左例改作)

二 君餽之則受之不識可常繼否乎。孟子萬章

然則何時而樂邪。其必曰：先天下之憂而憂，後天下之樂而樂。與噫！微斯人，吾誰與歸。  
苑文正公岳陽樓記

且詩不云乎：普天之下莫匪王土，率土之濱莫非王臣。是以六合之內，八方之外，浸淫衍溢。  
史記司馬相如列傳

これも(4)の「不識」曰は歸著語で(4)の「不識」且詩不云乎は修用語である。その區別は「也乎」與の位置で明確である。併し場合に由つてはさういふ有形的な區別が無くて漠然と區別される場合もある。

君家住何處。妾住在橫塘。停船暫借問。或恐是同鄉。  
唐詩選六崔顥

魯穆公使乘公子或宦。於晉或宦。於荆犁鉏曰……遠水不救近火也。今晉與荆雖強而齊近。魯患其不救乎。  
韓非子說林上

寄言全盛紅顏子。應憐半死白頭翁。  
唐詩選二劉廷芝

對曰：王請無好小勇。  
孟子梁惠王

聞說故園香稻熟。片帆歸去就鱸魚。  
三體詩二李鄴江亭秋霽

巴陵一望洞庭秋。日見孤峰水上浮。聞道神仙不可接。心隨湖水共悠悠。  
唐詩選七張

說逸樂六

聞曰：道人不聞。至德不得。大人無己。約分之至也。  
莊子秋水三

見說來居此未嘗離洞門。結茅遮雨露。採藥給晨昏。古樹藤纏殺。春泉鹿過渾。悠悠無一事。不似屬乾坤。  
三體詩三盧嶽隱者

臣聞朋黨之說自古有之。惟幸人君辨其君子小人而已。大凡君子與君子以同道爲朋。小人與小人以同利爲朋。此自然之理也。  
歐陽修朋黨論

然臣謂小人無朋。惟君子則有之。其故何哉。小人所好利祿也……同次

或謂愈。子言則然矣。宰相則知子矣。如時不可何。愈竊謂之不知言者。  
韓愈復上宰相書

敢問：國君欲養君子如何。斯可謂養矣。  
孟子萬章下

或問：諫議大夫陽城於愈。可以爲有道之士乎哉。學廣而聞多……  
韓愈爭臣論

吾嘗論義帝天下之賢主也。獨遺沛公入關。不遣項羽。識卿子冠軍於稠人之中。而擢以爲上將。不賢而能如是乎……  
蘇東坡范增論

世皆稱孟嘗君能得士。士以故歸之。而卒賴其力以脫虎豹之秦。嗚呼！孟嘗君特雞鳴狗吠之雄耳。豈足以言得士。  
王荆公讀孟嘗君傳

吾意周公輔成王宜以道從容優樂要歸之大中而已必不逢其失而爲之辭……  
柳子厚桐葉封弟辨

醉別江樓橘柚香江風引雨入船涼憶君遙在湘山月愁聽清猿夢裏長唐詩選七王昌齡  
凄々遊子苦飄蓬明月青樽祇暫同南望千山如黛色愁君客路在其中同八皇甫冉  
走馬西來欲到天辭家見月兩回圓今夜不知何處宿平沙萬里絕人煙同七岑參  
新林二月孤舟還水滿清江花滿山借問故園隱君子時々來往住人間同七儲光義  
古來容光人所羨況復今日遙相見願作輕羅著細腰願爲明鏡分嬌面同二劉廷芝  
屈原曰吾聞之新沐者必彈冠新浴者必振衣人又誰能以身之察々受物之汶々者乎史記屈原列傳

今年花落顏色改明年花開復誰在已見松柏摧爲薪更聞桑田變成海唐詩選二  
湖月林風相與清殘尊下馬復同傾久擗野鶴如雙鬢遮莫鄰雞下五更同七杜甫  
莫道秋江離別難舟船明月是長安隨意青楓白露寒同七王昌齡

右の——は皆歸著性從屬の斷句的修用語である。下の——はその被修用語であつて——を統率する。

「曰」の用法 「曰」は歸著形式動詞であつて本來の用法から言へば歸著語となつて人の言語(模型動詞)を客語とするものである。直譯すれば「何々と曰ふ」である。併し多くは歸著性從屬の修用語として用ゐる。例へば

子曰唯仁者能好人能惡人論語里仁

イ 子曰へり唯仁者能く人を好み能く人を惡む。

ロ 子唯仁者能く人を好み能く人を惡むと曰へり。

ハ 子曰はく唯仁者能く人を好み能く人を惡む。

ニ 子曰はく唯仁者能く人を好み能く人を惡むと。

の「曰」はそうだ。原文は(ハ)の意である。——は一度は終止してゐるが、——に從屬するから——だけではまだ一斷句にならない。「——」が一斷句である。(ハ)の意ではない。(ロ)では——が客語で「曰」が歸著語になる。併し古來の習慣は之を(ハ)の様に讀む。「曰」はくは動詞性副詞であるから、(ハ)では○○○は連詞的副詞である。そうして内包的主語になる。——は敘述語になる。模型動詞である。(ニ)の様に下に「と」があれば「いふ」の意を帯びて記號動詞化する。

「曰をいはく」と讀むのは眞の直譯ではないが非常に巧妙な和譯である。支那人が「曰を用ゐた心持に實に髣髴たるものが有る。

「曰が歸著性從屬の修用語として用ゐられるのはその意義が單純に獨立的に用ゐられる場合だけである。「曰へば」「曰ふとも」「曰ふ者」「曰ひ」などの場合は歸著性從屬に用ゐられない。

易曰雲從龍既曰龍雲從之。 韓愈雜說一

の下の「曰」は「曰へば」の意であるから斷句的修用語にはならない。その他第二三頁の「曰」などがそうだ。數の上から言へばそれは却つて甚だ少ない。

歸著性從屬の語の訓 歸著性從屬の語の若干は「曰をいはく」といふ類の特殊の訓が有る。

	第一活段	第二活段	第三活段	第四活段	第五活段	第六活段
四段活	曰	は	ひ	ふ	ふ	へ
同	恐	ら	り	る	る	れ
同	望	ま	み	む	む	め
						まく

ラ行變格	謂へ	ら	り	り	る	れ	らく
同	聞説	ら	り	り	る	れ	らく
同	以爲へ	ら	り	り	る	れ	らく
上二段活	憾	み	み	む	む	む	むらく
下二段活	憂	へ	へ	ふ	ふる	ふれ	ふらく

「望む」「惜む」は「望ましく」「惜ましく」といふべきであるが憾むらくなどの類推作用から望むらく「惜むらく」といふ様になつた。

此の第六活段は不定法的一種であつて動詞性名詞又は動詞性副詞となるものである。古人は此れを利用して漢文の歸著性從屬の語を譯したのである。古人が文法學なき漢學の研究に於て歸著語と歸著性從屬化との區別を發見して讀み方を分けるまでになつたのは一朝一夕の苦勞ではなかつたらうと思ふ。

尙此の外「遮莫」を「さもあらばあれ」と訓ずる様な特殊な訓がある。「遮莫」は「甚麼」の通音で「何」の意がある。「奈が」「いかんせん」「困る」の意であるのに對して「遮莫」は「いかなともあれ」「構はない」の意だ。

修用語と斷句の種類

□修用語の中題目語と斷句的修用語とは其の斷句をして特殊の性質を帯びしめる。されば斷句は題目語或は斷句的修用語を有するや否やに由つて有題斷句と無題斷句、單斷句と連斷句の別を生ずる。

有題斷句と無題斷句

□斷句はその代表部に從屬する題目語の有無に由つて、有題斷句と無題斷句との別を生ずる。

有題斷句とは其の判斷に判斷の對象を限定する語即ち題目語を有するものをいふ。

周公大聖人也。韓愈原毀

朋黨之說自古有之。歐陽修朋黨論

小人無朋。同

惟君子則有之。同

其暫爲朋者僞也。同

人與之錢則辭。韓愈送石處士序

勸之仕則不應。同

生亦我所欲也。孟子告子上

死亦我所惡也。同

などは皆有題斷句である。題目語——がある。

無題斷句とは判定の對象を限定する語即ち題目語のないものである。

月落鳥啼霜滿天。三體詩一張繼

盧橘花開楓葉衰。同一戴叔倫

日々河邊見水流。同上

武王已平殷亂天下宗周。史記伯夷列傳

伯夷叔齊恥之義不食周粟隱於首陽山采薇而食之。同

などがそうだ。

題目語が有つても、其れがその斷句の代表部に從屬するものでなくて一部分に從屬するものである場合には、その題目語はその斷句の判定の題目ではないから、その題目語の有無はその斷句の有題無題には關係しない。例へば

『非其君不事非其民不使治則進亂則退』孟子公孫丑上「伯夷也」

の——は題目語であるが、それは唯——に對する題目語であるから、その全斷句の有題無題に關係しない。この全斷句が有題であるのは「……」がその斷句の代表部なる「伯夷也」に對して題目語であるからである。

單純提示語は題目語ではないから單純提示語の有ることは有題無題に關係しない。題目語と單純提示語との別は第三章一六二頁に説いてある。

### 單斷句と連斷句

□斷句は其の一部に斷句的修用語の有るか無いかに関して單斷句、連斷句の二つに分たれる。

連斷句は斷句的修用語を有するものである。

昨年の夏なりき、余は樺太に行けり。

は連斷句である。——は斷句的修用語であつて、時は「昨年の夏なりき」の意味で、一旦獨立終止して一つの斷句を成すのであるが、最初抽象的に了解され、後、下の——を待つて始めて具體化するものであつて、其の敘述は——の事件の行はれた時に就いての敘述であるから、具體的の斷句としての獨立性を失ひ、詞の資格となつて——に從屬する。——と——との全體は二斷句でなく一斷句となるのである。

『何事、闌干淚溼衣。』唐詩選八武元衡

『可憐、緜嶺登仙子、猶自吹笙醉碧桃。』三體詩二許渾

『不知、經歷幾千秋。』唐詩選五王昌齡

『嗚呼、其亦不思而已矣。』韓愈原道

などは皆連斷句である。凡そ斷句的修用語を有する斷句は皆連斷句であるから、第七元一六頁に出てゐる諸例は皆連斷句である。

連斷句は斷句と斷句の連結したものであるとも云へる。併し連結した一方は一度は斷句として意味が終止しても他の一方へ從屬するために斷句としての資格



を失つてゐる。若しそらでなく、兩方が斷句のまゝ居るならばそれは二個の斷句であつて連斷句にはならない。

單斷句は斷句的修用語を有しない斷句である。換言すれば二個以上の斷句の連結でないものである。

複文論

多數の日本文典は文斷句を分けて單文、複文、重文の三つとしてゐる。例へば

單文 人來る。

複文 { 君公園に行かば我も亦行かむ。  
余今君の作れる詩を読む。

重文 彼は文を作り我は詩を賦す。

この區別は西洋文典の單純斷句(Simple sentence)複合斷句(Complex sentence)集合斷句(Compound sentence)の三別を誤解したものである。

西洋文典で複合斷句と稱するものは

*If you go to the park, I shall go there too.*

若し君が公園に行かむ、則ち我亦そこに行かむ。

*I am reading the poetry, which you wrote.*

我今詩其れを君が作りきを讀む。

の様なものである。其の斜字で書いた部分は斷句的修用語である。自己としては終止的用法であつて一度斷句を成してゐる。それは傍註の日本語の——の通りである。一度斷句を成し自己としての意義を終止させた上で更に一詞の資格となつて Shall go なり Poetly なりへ從屬してその運用を調整する。それ故此れらは皆二個の斷句が連結して一斷句となり一方が從屬化したものと云へる。これが複合斷句なのである。

然るに日本文典でいふ複文の中の「君若し行かば」や「君が作れる」は一度も意味が終止しない。一度も斷句にならない。「行かば」は連用格で「作れる」は連體格で何れも終止格ではない。始めから從屬的である。それだから「君若し行かば我も行かむ」でも「我君が作れる詩を讀む」でも最初から一斷句であつて二斷句の連結したものではない。こゝにいふものを複文といふことは誠に無益なことである。英語の右の例の斜字の部分はその動詞が決して連用格や連體格ではない。終止格である。即ち分詞法ではない。分詞法ならば從屬的であるが or や wrote は分詞法ではない。右の例の斜字で書いた様なものは之を Clause と云ふ。Clause とは從屬性斷句即ち斷句の從屬化したものゝ意である。動詞は自己の主語又は客語が關係代名詞である場合又は假設態である場合、接續詞、などを戴く場合にはその斷句は從屬

化するのである。英文典などの説明には Clause は主語と敘述語とより成る連詞であるとしてあるがそれは平易な説明であつて理論的に言へば断句の獨立性を失つたものである。(英語などには分詞法は主語を取らないが若し分詞法が主語を取つたとしても其れは Clause) はなす。日本語や漢文では分詞法連體格が主語を取るがそれは Clause) はなす。何となれば断句性がなくて始めから從屬的であるからである。西洋文典で複合断句と稱するものは從屬断句と獨立断句との連結したもので即ち私のいふ連断句である。日本文典でいふ複文重文は單純断句である。西洋文典の複合断句私のいふ連断句は二断句の連結であるから單断句と區別する必要がある。何となれば断句が獨立性を失つて詞として取扱はれるのであるから説明しなければ譯が分らない。日本文典でいふ複合文に於ける「君若し行かば」の類「君が作れる詩」の類は始めから從屬的であるからたゞの修用語連體語である。別段特殊の説明は要らなす。私は世上の日本文典でいふ様な單文複文重文の三別は取らなす。

### 第五節 連體語と被連體語 連體關係の連詞

連體關係の連詞は連體語と被連體語とより成る。

連體語とは相與に一つの連詞を構成する二成分の一方であつて、他の一方を統率語にして之に從屬し、其の表はす意義の體(實體)を整理するものである。例へば

此人 彼國 是言 其語  
諸先生 我父 王城之東 長城之北

の——は連體語である。——の概念の實體を整理し之と與に一連詞を成してゐる。——の概念の運用へ從屬するのではなく直接にその概念の體へ從屬する。

被連體語とは、自己の表はす概念そのものが連體語の表はす概念を統率して連體語と共に一連詞を成し、自己がその連詞の代表部となるものである。前例の——はそうだ。

連體語に修飾的連體語、相對的連體語、主體的連體語の三種が有る。

一、修飾的連體語 修飾的連體語は單にその被連體語の意義を修飾する連體語である。被連體語の概念の具備性に關係しない連體語である。例へば「二月之花」の「二月」は連體語であるが單に「花」の意義を修飾して之を詳しくするだけで「二月

之が無くても「花」といふ概念は何等の缺陷なしに了解される。こういう連體語が修飾的連體語である。

二、相對的連體語 相對的連體語は相對的概念に對してその相對性の基準たる概念を表はす連體語である。その統率語の概念の缺陷を補充してその概念を具備的ならしむるものである。例へば「吳起之妻」孟子之母の「吳起之」孟子之の類だ。「妻母」は夫たるもの子たるものに對する相對的概念であるから、實は一つの概念の一部分であつて、他の部分と合體しなければ意義が具備しない。「吳起之」孟子之はその相對性の基準を表はしてゐる。

三、主體的連體語 主體的連體語は作用の主體の概念を表はし、之を作用の概念の實體に從屬せしむるものである。

增之欲殺沛公人臣之分也。蘇東坡范增論

羽之不殺猶有君人之度也。同

の「增」羽は主體で「欲殺沛公」不殺は作用である。——は——なる作用の主體を表はして之を——なる作用概念の體に從屬せしめる。——は主體的連體語で——は

その被連體語である。——は主體を表はしても主語とは違ふし、——は敘述語とは違ふ。

今右の例を主語敘述語に改めれば

增欲殺沛公是人臣之分也

羽不殺是猶有君人之度也

となる。主語は主體概念を主體概念としてそのまゝ表はし、之を作用概念の用運(用)へ從屬せしめる。主語は連用語である。主體的連體語は主體概念を一つの材料として之を以て屬性概念を作り、之を作用概念の體へ從屬せしめる。

主體的連體語は他の二種の連體語と違ひ、表示態名詞へ從屬せずに動詞又は敘述態名詞の上へ從屬する。併し其の意義の體へ從屬するのであるから連體であつて連用ではない。

### 修飾的連體語及び被連體語の材料

連詞の中に在つて修飾的連體語となるものは副體詞、名詞、動詞の三種であつて其

の被連體語となるものは名詞である。

一副體詞

明年	翌川	昨日
是人	彼山	此河
一人	百花	萬國
幾年	何事	多少人

——は副體詞で修飾的連體語——は名詞で被連體語である。  
形式連體詞「之」は實質語を統率した上で修飾的連體語となる。

孫吳之兵法

蘇張之辯

賁育之勇

仲秋之月

孟春之花

晚冬之雪

——と——とが連詞となり——がその連詞の代表部となつて修飾的連體語となり、——が被連體語になつてゐる。

「之」は前言に寄生してその意義が實質化した場合には「之數子之二人」などの様に實質語なしに用ゐられる場合が稀に在る(第三頁)。又自己の被連體語に因つて實質

化した場合も詩經などには澤山有る。例へば「之子于歸」などいふ様なので「之は子」を指すのである。(第三頁)

二 表示態名詞

孫吳兵法

蘇張辯

賁育勇

仲秋川

孟春花

晚冬雪

この用法は名詞が直接に名詞を修飾するから「」よりは語勢が張る。「」は「之」で上の名詞の意義を再示するから語勢が緩になる。

三 敘述態名詞(第三頁參考)

白髮老人

白髮之老人

黃口豎子

黃口之豎子

紅顏美少年

紅顏之美少年

兩頭蛇

兩頭之蛇

三脚架

三脚之架

右の上段の——は敘述態名詞が修飾的連體語になつたものである。下段は「」の

例であつて之が有るから語勢が緩である。

四 動詞

1 真知輕重大夫

真知輕重之大夫

允文允武皇帝陛下

允文允武之皇帝

關々雉鳩

關々之雉鳩

窈窕淑女

窈窕之淑女

2 與人書

與人之書

上高宗封事

上高宗之封事

3 祭十二郎文

祭十二郎之文

落花深處

落花深之處

右の例の上段の——は動詞から出來た修飾的連體語である。その中(1)の——に在つては被連體語の表はす事物は自己の作用の主體である。自己の主體を修飾するから之を連主といふ。(2)の——は自己の客體——を修飾する。之を連客といふ。(3)の——は自己の主客體以外のものを修飾する。之を連外といふ。

此の(1)即ち連主の連體語たる動詞は合主化して主語を取らない。主體は被連體語が表はすからである(第<sup>五</sup>頁)。又(2)即ち連客の連體語たる動詞は非歸著化して客語を取らない。被連體語が客體を表はすからである(第<sup>三</sup>頁)。併し之を非歸著化せしめずに「所」を客語としてその上に置く場合もある。

所與人書

所與人之書

所上高宗封事

所上高宗之封事

所は複性詞であつて名詞性が有るから右の例の——や——は一つの連詞的名詞である。右の例の下段の——は「之」に對して實質語をなし「之」と共に一連詞を成し、その連詞が連體語となつたもので、「(第<sup>五</sup>頁)の用法である。上段の——は直接に下の——へ續くから語勢が張り、下段の——は「之」に因つて下の——へ續くから語が緩である。

相對的連體語及び被連體語の材料

相對的連體語となるものは副體詞、名詞の二つである。

一副體詞

其父

孟子之母

厥母

晏子之御

二名詞

東山上

赤壁下

孟子母

晏子御

東山之上

赤壁之下

孟子之母

晏子之御

下段の様に下に「之」が有ればその「之」は「(第壹頁)の用法である。相對的被連體詞となるものは相對名詞である。右の例の——はみな相對名詞である。

相對名詞がその本性のまゝに用ゐられた相を相對態といふ。相對態の相對名詞は必ず被連體詞となる。例へば「妻は唯妻だけでは意味が具備しない。必ず「某妻某之妻其妻」といふ。

併し相對名詞は絶對化する場合がある。之を相對名詞の絶對態といふ。その場合は相對的連體語を要しない。例へば

晏子爲齊相。出。其御之妻。從門。而闕其夫。其夫爲相。御。擁大蓋。策駟馬。意氣揚々。甚自得也。既而歸。其妻請去。夫問其故。妻曰。晏子長不滿六尺。身相齊國。名顯諸侯。今者妾觀其出。志念深矣。常有以自下者。今子長八尺。乃爲人僕。御。然子之意。自以爲足。妾是以求去也。其後。夫自抑損。晏子怪而問之。御以實對。晏子薦以爲大夫。

史記管晏列傳

右の例の○と●は皆相對名詞である。○は相對態で上にその相對的連體語——が有り、——に因つてその相對の基準が判るのである。●は絶對態である。「夫」は前からの關係上誰の夫と云はなくても分るから絶對化する。「妻」もそうだ。「長」も一々「其長」と云はなくても分る。「身名御實」みな「其身其名其御其實」と云はなくても分るから絶對化する。

英語などの相對名詞には絶對態が甚だ少ない。一々誰の夫誰の妻といふ様にその相對の對手を云ふのである。漢文では云はなくても分る場合には大抵言はな

い。併し言ふ方が善く分る場合には言ふ。「其」の字を用ゐるか用ゐないが文の巧拙の分れる所で、拙手ならば甚しきは意義が分らなくなるか或は一々「其」が附いて煩雜に堪へない様なことになり易い。

絶對名詞は大體常に絶對態に在るが稀には相對化するところがある。之を絶對名詞の相對態といふ。例へば「山海」は絶對名詞である。その質は「土地水」に決つてゐる。然るにその質が「土地水」でない時は相對態である。その場合には「死屍之山歌吹之海」などいふ風に相對的連體語を冠する。

### 主體的連體語及び被連體語の材料

主體的連體語となるものは副體詞の「其厥」と「之」との二つである。その他の語は主體的連體語にはならない。

#### 一 其厥

其得水變化風雨上下於天不難也。其不及水蓋尋常尺寸之間耳。無高山大陵曠塗絶險爲之間隔也。韓愈應科目時與人書

#### 二 之

其哀之命也。其不哀之命也。知其命而且鳴號之者亦命也。同  
故曰非常之原黎民懼焉。及臻厥成天下晏如也。史記司馬相如列傳

天下皆知美之爲美。斯惡已。皆知善之爲善。斯不善已。老子上

周公之不有天下猶益之於夏伊尹之於股也。孟子萬章上

帝之興王其號雖殊其所以爲聖一也。韓愈原道

老子之小仁義非毀之也其見者小也。同

孔子之作春秋也諸侯用夷禮則夷之。同

是君子之所難而小人之所易也。歐陽修縱囚論

蓋恩德入人之深而移人之速有如之者。同

「之」は上の——を統率した上で主體的連體語になるのである。下の——はその被連體語だ。

「之」は前言に寄生してその意義が實質化した場合には「而獨不聞之」ナシテ「參々」タラタ「乎」などの様に實質語なしに用ゐられることが稀にはある。(第三九頁參考)

主體的連體語の被連體語は之を敘述的連體語といふ。これは動詞又は敘述態名詞から成る。例へば、

鳳兮鳳兮、何德之衰。論語微子

抑所寶之非賢。韓愈祭田橫墓文

の(の)は動詞で(の)は敘述態名詞である。

然るに動詞又は敘述態名詞は敘述的連體語になると動詞又は敘述態名詞のまゝ居ることは非常に少く大抵は動詞性名詞又は敘述態名詞性の表示態名詞になるものである。例へば前頁の諸例の——は皆動詞から變化して動詞性名詞となつてゐる。但し動詞性名詞になつても、その連體語に對して被連體語たる點はその動詞的性質(敘述態名詞的性質)に在るのである。尙その如何なる場合に動詞のまゝ居り如何なる場合に動詞性名詞となるかに就いては第二章——三頁の再讀を煩はす。

主體的連體語が二つあつてその敘述的連體語が一つなる場合も有り得る譯である。その實例は極めて稀だが有ることは有る。

有道之臣不貴其家、有道之君不貴其臣、貴之富之、備將代之。韓非子揚權  
「富貴の備れば(臣)將に之(君)に代らむとす」といふと「富貴」の意が不明瞭になる。富と貴とを分けて「富の、貴の備れば」と云へば「富の備れば貴の備れば」と云つたと同じ様になる。之を圖解すれば

富之  
貴之  
備將代之

であつて、即ち並流斷句になる。

動詞及び敘述態名詞の分主態に在るものは必ず主語を要する。主語に由つてその缺如せる主體概念を補給しなければその意義が具備しない。併し何等かの方法で其れが合主化されば主語は要らない。主語なしに主體の觀念が得られるからである。否主語を附加することも分主性を合主化させる方法の一つなのである。

分主性の動詞を合主化させる方法は澤山ある。今「弒義帝」といふ連詞なる分主性動詞に「項羽」といふ主體概念を與へる方法に就いて之を示す。



- 1 項羽弑義帝  
主語
- 2 夫項羽弑義帝  
主體の提示的修用語
- 3 大王必勿殺義帝  
喚呼態斷句的修用語
- 4 弑義帝者何人也  
形式語
- 5 弑義帝之羽豈不失人心哉  
主體的被連體語
- 6 夫已弑義帝羽之失人心也宜矣  
自然的關係
- 7 羽之弑義帝蓋其所以失天下也  
主體的連體語

分主性の動詞は右の様な種々の方法に由つて主體概念の補給を受け此に始めて合主化して合主態となる。合主態となれば最早主語は要らない。苟くも分主態に在る以上は主語が要る。そうして主體的連體語と主體の提示的修用語とは主語の代用になる。併しその主體を表はす表はし方は違ふ。此の問題に關しては尙第六頁の一瞥を煩はす。

### 第三章 成分の排列

#### 第一節 成分の直接關係

##### 意識流の方向

觀念は其の出來た結果から言へば心裡に於ける一つの印象であつて超時間的のものであるが、その發生から言へば一つの作用であつて時間を要する。時間的關係は單詞の内部に於てさへ認められ、連詞に於ては殊に著しい。連詞は觀念と觀念とが統合されて出來た統合觀念を表はすものであつて、從屬語と統率語との二成分から成立するものである。そうして統合觀念も一つの觀念であるから、統合觀念の中には、統合觀念と統合觀念とが統合された大なる統合觀念もあるのである。されば連詞は從屬語と統率語との二成分から成るものであるが、その從屬語なり統率語なりが連詞である場合もあるのであるから、從屬語な

り統率語なりの内部に小なる從屬語と統率語とある場合が有り、更にその内部に幾層の從屬語と統率語との有る場合が有ることを考へなければならぬ。かくて連詞は短きは二三字より長きは幾十行に及ぶものが有り、其の層は單層より幾十層に及ぶのであるが、何れの層に於ても連詞は必ず從屬語と統率語との二部より成るのである。

從屬語は統合觀念内における從屬的觀念を表はすもので、これには主語、客語、實質語、修用語、連體語の五種があり、皆その統率語へ從屬する。統率語は統合觀念内に於ける統率觀念を表はすもので、從屬語を統率してその連詞を代表するものである。主語を統率するものを敘述語とし、客語を統率するものを歸著語とし、實質語を統率するものを形式語とし、修用語を統率するものを被修用語とし、連體語を統率するものを被連體語とする。統率語は連詞の代表部である。觀念から言へば統率的觀念は統合觀念の代表部である。從屬語從屬觀念は補助物たるに過ぎない。今統率語が連詞の代表部である所以を具體的に説明すると、

南柯之夢

夏胥之夢

邯鄲之夢

蝴蝶之夢

——は從屬語(連體語)で、——は統率語である。南柯の夢も夏胥の夢も皆夢である。夢の一つである。南柯の夢は南柯の一つではない。「夢」が「南柯之夢」といふ連詞の代表部であることはこの説明で解ると思ふ。

燈下讀書

綠陰讀書

園中讀書

舟中讀書

——は從屬語(修用語)で、——はその統率語だ。右の四つは皆「讀書」の一つである。

「燈下讀書」は「書を読む」といふ動作である。「燈下」といふ場所ではない。

讀古書

讀家信

讀文章

讀檄文

——は歸著語(統率語)で、——は客語(從屬語)だ。此の四つは皆「讀」が代表部である。「讀古書」は動作である。物ではない。それだから「讀」動作が代表部で古書(物)は從屬部だ。

此れまでのことは常識と一致するから甚だ分りが善い。併し此れから言ふこと

は常識と違ふから讀まれる方が或は可笑しいと思はれるかも知れない。讀みながら深く思惟せられむことを希望する。

我等

汝等

張良等

韓信等

——は實質語(從屬語)で——は形式語(統率語)だ。この四つは皆等がこの連詞の代表部である。我等も汝等も皆等の一つである。「我等は我ではなくて等」である。

梅花開

桃花開

牡丹開

菊花開

——は主語(從屬語)で——は敘述語(統率語)だ。此の四つの連詞は皆開が代表部である。「梅花開」は動作である。物ではない。即ち開の一つであつて「梅花」の一つではない。それだが「梅花開」中の重要部は「開」であつて「梅花」ではない。然るに「梅花」は主語であるから主語といふことを誤解すると「梅花が梅花開」といふ連詞中の主要部だと思ひ易い。併しそれは誤解である。主語とは斷句の主要なる語といふ意ではない。作用の主體を表はす語といふ意だ。作用の主體であるだけで斷句の主

ではない。斷句の主要部、敘述の主要部は「開」である。喩へば病氣の時醫者を招いたとすると、我々の求める所は醫者の診断治療といふ作用である。醫者の身體を求めるとはではない。醫者の身體は作用の主體であるが我々の求める所のものではなくて唯その作用の持主である。

連詞は從屬語と統率語との二部から成立するものであつて、此の二成分は同時に口に發することは出来ない。何れかが先で何れかが後でなければならぬ。又觀念に就いて云つても、統合觀念は從屬觀念と統率觀念との二部から成立するものであつて、何れかが先に意識せられ何れかが後に意識されなければならぬ。即ち意識は一方の觀念から他の一方の觀念へ移るのである。此の意識の移動の方向が即ち連詞に於ける成分排列の順序である。

觀念に從屬部と統率部とあることは統合觀念だけではなく、單一觀念に於てもそうである。觀念には實質とその運用とあつて、實質は從屬部で運用は統率部である。例へば漢文で「觀花」日本語で「花を觀るといふ、その「花」を「は」單一な觀念である。日本語で言へば「花は實質で從屬部であり、を」は運用で統率部である。漢文では「を」

といふ助辭は附いてゐないが、その意味は「花」といふ觀念の中に含まれてゐる。それが統率部である。

人の心意に於て統合觀念が構成される場合に從屬觀念と統率觀念と何れが先に意識されるかと云ふと、其れは兩方あり得る。從屬觀念が先で統率觀念が後でも又反對でも、どちらでも統合觀念は成立する。

併しながら世界各國の國語の實際に徴するに、一般原則としては意識流は從屬觀念から統率觀念へ流れるのである。唯特殊の原則に支配されて之に反する場合がある。其れは何れの國語でも主語が敘述語の前へ置かれ、連體語がその統率語の前へ置かれることが共通であるのでも分る。その客語や、實質語や修用語が後へ置かれる様なことの有るのは、其れこそその國語に於ける特殊の事情に支配されるのでなければならぬ。

從屬部の方が先に置かれるものであるべきことはまう一つ此ういふ現象がある。其れは單詞に於ける格の記號が世界各國揃ひも揃つて語尾又は尾助辭に由つて示されることである。格の記號を頭へ附ける國語は何處にもない。日本語で言

へば「月が」月の月に「月を」などいふ「が」の「に」を尾助辭である。「月が」も「夜が」も「人が」も皆「が」の一種である。「月が」は一種の「が」であつて一種の「月」ではない。唯「か」とのみ云つては何んぞ「か」だから分らないから「月が」と云ふので「月が」の代表部は「が」である。

以上は實際の調査に由つて、本來の性質上、從屬部が先に考へられ統率部が後から考へらるべきものだと思ふのであるが、理論上もそうなければならぬ理由がある。それは觀念、殊に統合觀念の成立には時間を要するものであるから、其の意識は代表部に於て最も鮮明でなければならぬ。即ち意識が現在の活きた意識でなければならぬ。過去の意識の殘象では思惟に於て不便である。そうすれば從屬部を先に考へて代表部を現在に置かなければならぬ筈である。其れ故統合觀念の順當なる發生に在つて意識流の方向は從屬部から統率部へ向ふべきであり、連詞の成分の排置は此の原則に従つて從屬部を先に置き統率部を後に置くべきである。吾々は此ういふ排置法を順置法といふ。

今日本語の成分の排置法を觀るに全然順置法である。